

第 2 7 回
戦争体験を語り継ぐ集い
戦時体験記録集 < 2 2 集 >

歌でも非戦闘員
婦女子を帝国主
義へ巧みに洗脳
しました

兵隊さんよ
ありがとう

一 肩をならべて兄さんと
今日も学校へ 行けるのは
兵隊さんのおかげです
お国のために
お国のためにたたかった
兵隊さんのおかげです

二 タベ楽しいご飯どき
家内そろって語るのも
兵隊さんのおかげです
お国のために
お国のために傷ついた
兵隊さんのおかげです

三 淋しいけれど母さまと
今日もまどかに眠るのも
兵隊さんのおかげです
お国のために
お国のために戦死した
兵隊さんのおかげです

四 明日から支那の友達と
仲よく暮していけるのも
兵隊さんのおかげです
お国のために
お国のために尽くされた
兵隊さんのおかげです

※昭和十四年（1939）

お父さんを戦争
から守ろう！
ご主人を手放す
な！
逆縁死させるな！

軍国の母

一 心おきなく国のため
名譽の戦死頼むぞと
涙も見せず励まして
我が子を送る朝の駅

二 散れよ若木の桜花
男と生れ戦場に
銃剣とるも大君の為
日本男子の本懐ぞ

三 生きて還ると思うなよ
白木の箱が届いたら
でかした我が子天晴れと
お前を母は褒めてやる

四 強く雄々しく軍国の
統後を護る母じやもの
女の身とて伝統の
忠義の二字に変わりなし

※昭和十二年（1937）
自王國の妻

一 歓呼の声や旗の波
後は頼むのあの声よ
これが最後の戦地の便り
今日も遠くで喇叭の音

二 思えばあの日は雨だった
坊やは背でスヤスヤと
旗を枕に眠っていたが
頬に涙が光ってた

三 ご無事のお還り待ちますと
言えは貴方は雄々しくも
今度逢う日は来年四月
靖国神社の花の下

四 東洋平和の為ならば
なんで泣きましよう国の為
散った貴方の形見の坊や
きつと立派に育てます
※昭和十三年（1938）

と こ ろ 緑生涯学習センター
月・日 平成27年7月25日
戦争体験を語り継ぐ集い実行委員会

70年前

長い昭和の戦争を終らすのに

日本全土が燃え

双方で2316万の命を失い

平和の尊さと ありがたさを

知った



を護り 私たちは 働き

奇跡と讃えられた復興に胸を張った

なのに戦後70年

戦争をしたがる人が増えている

ストップをかけなければ！！

< 発刊によせて >

もくじ

レジュメ・おじいちゃん聞かせて	語部・小島	久志	一頁
レジュメ・軍馬に助けられた命	語部・伊藤	芳雄	二頁
レジュメ・母の死で初めて知った父	語部・関谷	敏雄	三頁
レジュメ・731部隊をみつめて	語部・神谷	則明	四頁
白衣を再び戦場の血でよごさないために	五十嵐	真理子	五頁
戦争はこんなにも惨い	野田	光輝	一三頁
敗戦の頃の想い出	千賀	重安	一五頁
踏みにじられた人間性	小川	雅康	一六頁
生きることに	田邊	泰	一八頁
勤労動員に明け暮れた学生生活	鈴木	大昭	一九頁
わが家が燃えてしまった	井村	正則	二一頁
戦争体験記・良かったことふたつ	鈴木	ツヤ	二二頁
私の逃避行	小倉あやよ		二四頁
満蒙開拓団	西岡	秀子	二六頁
戦争の被害者	伊藤	安治	二七頁
吸血ダニ	宇野	宗佑	二九頁
棄民のあしあと	編集	子	三三頁
棄民のあしあと	夏梅	誠一	三六頁
教育勅語で育てられた少年期	橋詰	四郎	四五頁
私のしたこと	陰地	茂一	五七頁
戦後七十年戦争終結前後	六二頁	六六頁	

「おじいちゃん、戦争の話を聞かせてください」
――孫と祖父（90歳）の語り継ぎアルバム――

名古屋市名東区の八木湧太郎君（中学2年）が、小学校5年生の夏休みに祖父の進さん（90歳）さんから、アフリピンなどでの戦争体験を聞き、写真や挿絵を入れて一冊にまとめました。

八木進さんは、22歳の1942（昭和17）年、岐阜県各務ヶ原の陸軍第一航空隊に入隊しました。フィリピンに移り、マニラのネルソン飛行場で気象班に入り、天気図を作って東南アジアの天気をパイロットに教える仕事をしていました。

1945（昭和20）年1月米軍が上陸し気象中隊（150人）は基地を捨て、3月には第4野戦補充隊（800人）に組み込まれ、バテリ峠の守備に参加しました。守備隊は米軍の後方への迂回作戦で、本隊と分断され最前線に取り残されました。ジャングルでの食料は、米軍用にパラシュートで落とされたのを横取りしたり、夜中に忍び込み敵の陣地から奪い取ったりしました。

また住民たちが飼育しているブタやニワトリ、畑で栽培している野菜やサツマイモなどを取っていました。警戒が厳しくなり最後はデンデン虫やナメクジ、ネズミ、ゴキブリ、ネズミ、ヘビなど、何でも食べ命をつなぎました。

11月の終り頃フィリピンの軍人と日本軍の将校が敗残兵を探しに来て、敗戦を告げられました。7ヵ月間山中にいたバテリ峠の守備隊（800人）で、生き残ったのは6人だけでした。1945（昭和20）年12月ケソンに移され、捕虜生活が始まりました。

――以下折り込み資料ご参考にして下さい――

この冊子は2014年8月湧太郎君の母親から「ピースあいち」に寄贈されツイッターでも「貴重な価値ある記録です」語り継がれるべきです」など評判になりました。

また湧太郎君も「おじいさんの苦勞を人に知ってもらえて嬉しい」と喜んでいました。

参考資料Ⅱ 2014年10月5日Ⅱ中日新聞

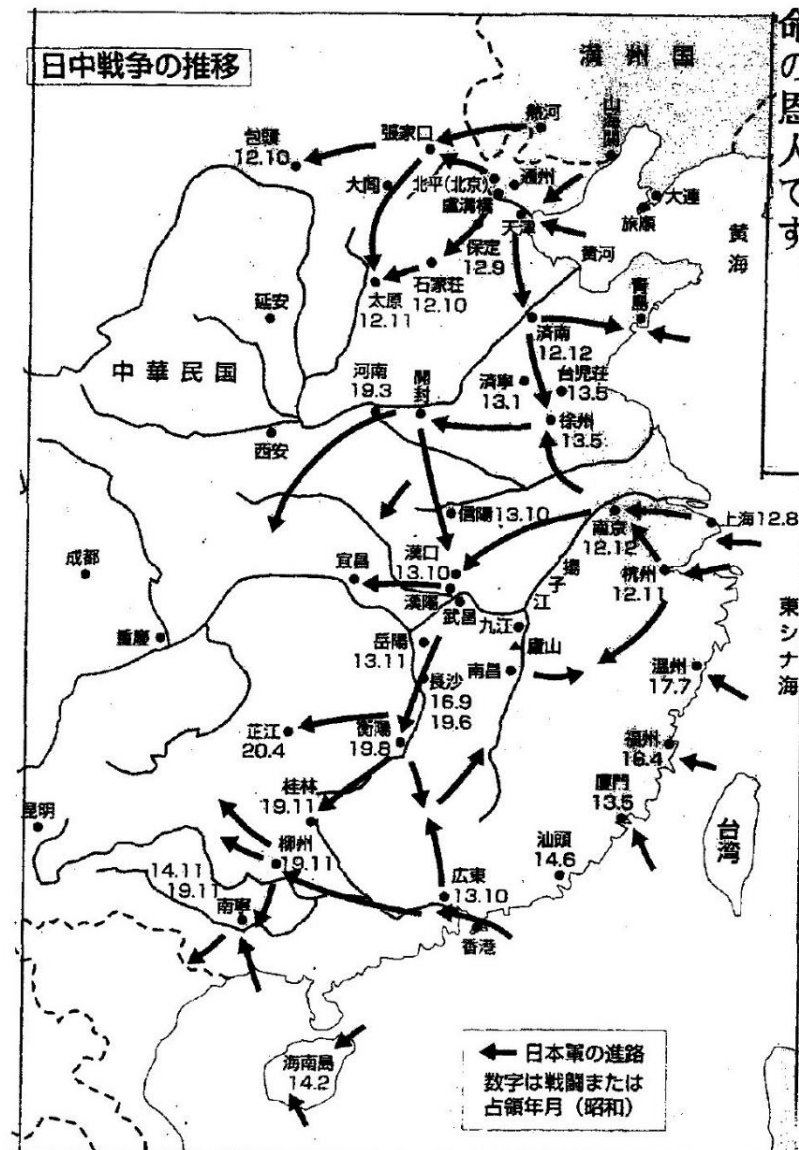
中国最後の戦闘【湘桂作戦】に参加して
軍馬との想い出

漢口〜桂林間。野や山に寝て戦争をしながら歩いて往復してきま
した。砲兵は体一つの歩兵と違い大砲を曳いて山又山を不眠不休で
。昼はアメリカ軍の空襲に偽装で隠し大変です。未舗装のぬかるむ
道でも平地はやれやれ。山地は地獄道、平地は極楽道。

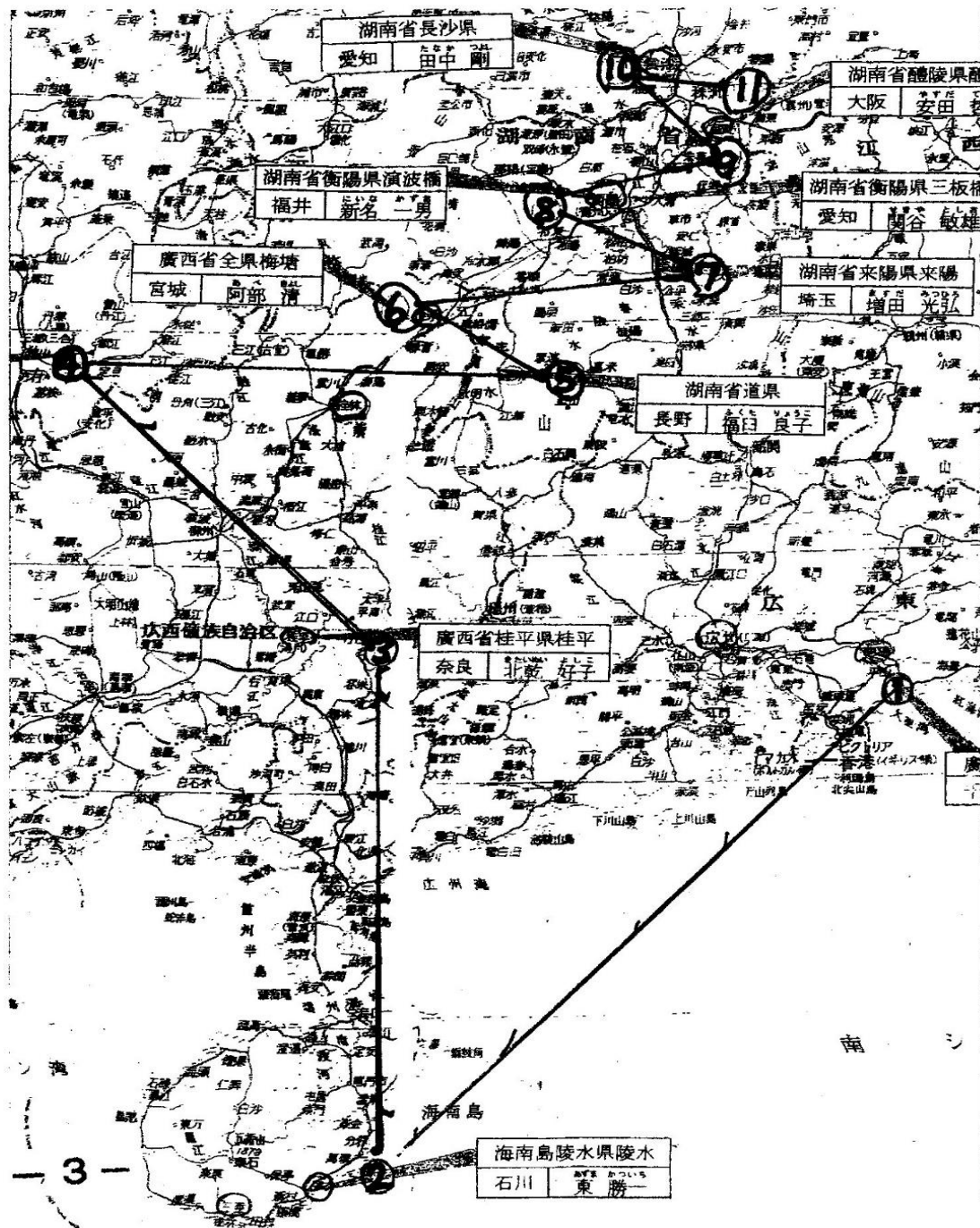
過労と不衛生で下痢やマラリヤ発病者続出。敵弾でなく疫病死が
多く。私も感染し体力の限界と死を覚悟した時。中隊長が馬に乗れ
と言ってくれたのです。馬に乗れて助かったのです。馬の名は『
青風』今でも忘れずに覚えています。

私は戦場より一足早く原隊（南京）に戻り、本隊は1945（昭
和20）年5月作戦を終え『青風』も一緒に帰ってきました。迎え
た私を『青風』も覚えていて涙で一杯でした。私は中隊長にお願
いして『青風』を私の「担当馬」にして戴き、一所懸命『青風』のお
世話と手入れに励みました。

そしてその年の10月『青風』を中国に残し私は復員しました。
別れの辛さは今も胸を締め付けます。『青風』は私の戦友であり、
命の恩人です。



南京〜漢口＝船 漢口〜桂林間は
大砲を曳いて押して戦争して往復



語部 関谷 敏雄

父は私の顔も体温も知らないし私も...

母と胎内に私を残して...

2015年3月20日～29日まで日中友好訪問団の1人として、中国大陆で戦死した父の死場所を、それぞれ10ご遺族方と弔い、鎮魂の旅をしてきました。

私は1944年3月10日生まれの71歳。
父は1916年12月生。20歳で徴兵入隊。
3年間の軍隊生活を無事に果し満期除隊。
1943年3月26歳で結婚。
母と胎内に私を残し召集（赤紙）2度目の軍隊
1944年10月。27歳。 中国で戦死。

今年の3月20日、成田空港→中国広州空港

順	慰霊者名	県名	死亡地名	遺骨は？
①	西	千葉	廣西省惠陽	
②	東 勝一	石川	海南島陵水県陵水	
③	北乾良子	奈良	廣西省桂兵県桂平	
④	横地	愛知	貴州省具街	
⑤	福田良子	長野	湖南省道県	
⑥	安部 清	宮城	廣西省全県梅塘	
⑦	増田光弘	埼玉	湖南省来陽県来陽	
⑧	新名一男	福井	湖南省衡陽県波橋	
⑨	関谷敏雄	愛知	湖南省衡陽県三板橋	
⑩	田中 剛	愛知	湖南省長沙県	
⑪	安田 哲	大阪	湖南省醴陵県醴	

長沙空港→北京→成田空港29日帰国。

語部 神谷 則明

1731部隊をみつめてー

※ご来場の方は語部提供（本冊子折り込み資料）ご参照

モ

メ

戦争のできる国と医師たちから 日赤看護師の手記

白衣を再び戦場の血で

汚さないために

―従軍看護婦の歴史から集団的自衛権を考える―

五十嵐 真理子

先の大戦中では、私たちの先輩は従軍看護婦として派遣され、国内でも日赤をはじめ多くの病院が軍病院として接收された。「集団的自衛権」は、世界規模で米国の軍事行動に共に参戦できる体制をつくり、私たち医療労働者も組み込まれる。有事になれば今の医療体制が崩壊することは明白だ。そもそも傷病兵を生み出す事態を絶対につくりださないことが、平和憲法を持つ国民の責務ではないのだろうか。

★はじめに★

私が全日本赤十字労働組合連合会（全日赤）本部役員になった1999年には、政府は「新しい日米防衛協力のための指針（ガイドライン）―関連法案」を制定し、その後2002年には有事法制が成立、その法律で日本赤十字社は、国立病院機構をはじめとする独立行政法人やNHK、日銀、ガス、交通、NTTとともに指定公共機関とされた。いろいろな集会や学習会で、「戦地における医療の仕事は、単に負傷者の救護だけでなく、治療した兵士が戦線に帰ることから戦力の回復を意味し、戦時を維持させる役割がある」ことを学び、もし私が戦地に行くことになったなら、本来の「いのちをまもる」ことが仕事のはずなのに、他の「いのちを脅かす」ことになり、集団的自衛権を考えたい。

★日赤の成り立ちと従軍看護婦
従軍看護婦養成のための組織★

日本赤十字社（日赤）と従軍看護婦（戦時救護看護婦）について簡単に振り返る。日本赤十字社は、その前身を博愛社といい、1877（明治10）年に西南戦争の傷病兵の救護活動をきっかけに創立された。発足から第2次世界大戦まで歴代の皇后が名誉総裁で、病院の創設の目的は、軍隊の負傷兵を救護する看護婦を養成することとしていた。はじめから、従軍看護婦の養成するためにつくられた組織だった。

1894（明治27）年に始まった日清戦争では、日赤と大学病院などで養成した看護婦600余人が従軍した。1900（明治33）年の北清事変では、看護婦は海上勤務にもつくようになり、赤十字船に700余人の看護婦が乗り負傷兵を運んだ。1904（明治37）年の日露戦争の頃には、教科書は軍医が書いたものになり、速成教育され2000人が従軍した。そして100人以上の看護婦が犠牲になったと伝えられている。1921（大正10）年には、日赤の救護看護婦にあわせて、陸軍看護婦が誕生し、内外地の陸軍病院に配属された。1937（昭和12）年に日中戦争が勃発、日赤は救護班の大量派遣要請をうけて、「日赤臨時救護看護婦」の教育を始めた。

★養成年齢の引き下げ大量派遣へ★

戦争中は多くの医者や看護婦が召集を受け従軍したために、国内にはほとんどいなくなった、今よりずっと少ないが、6万7千人いた医師は1万1千人、看護婦も15万いたが3万人と激減している。戦火は拡大し、太平洋戦争となるにつれ、看護婦も大量に必要となり、1941（昭和16）年には、養成開始年齢18歳を17歳に、1944（昭和19）年には、さらに16歳へ年齢を引き下げ養成した。養成期間も短縮され、1年か1年未満の教育で、しかも軍事中心の教育だけ行なうようになった。さらには、女学校卒業者には、無試験で免許を与えるようになった。日中戦争から太平洋戦争の終わる1945（昭和20）年8月15日までの救護班は93回、960班、33、156人が赤紙で召集され、死傷者は、832人におよんだ。陸軍看護婦や海軍看護婦や沖繩の「めゆり部隊」など女学生で結成された臨時看護婦の犠牲を含めると、その数はもっと大きいものになる。

★青酸カリを持たされ★

☆その1

17歳で沖繩県立第二高等女学校を繰り上げ卒業し、速成看護婦として沖繩県内の野戦病院に赴任した楠政子さんは、情勢が悪化し、近くの部落まで米軍が進出してしていると聞いた時、ついに病院に解散命令が出された。歩ける者は原隊復帰させるために退院を命じ、どうしても動けぬ者には青酸カリで自決させられた。

☆その2

1944（昭和19）年7月満州延吉陸軍病院に配属された従軍看護婦の津村ナミエさんは、赴任してから1年後に敗戦を迎える。

1945（昭和20）年8月9日、ソ連が満州に侵攻してきた。兵隊からは「ソ連は捕虜をシベリアに連れて行く。お前等看護婦は露助（ロスケ）ロシア人に対する蔑視語」妾になるのがせいぜいだ」と不安をかき立てることばかり言われたそうだ。敗戦から3日目くらいに、「上司の命令だ」と言って青酸カリの赤い葉包が手渡された。いざという時服用して潔く死ねということだ、日赤の看護婦は青酸カリで死ななければならぬのかと思った時、猛然と怒りがこみあげてきたという。

★水筒より軽いいのち★

フィリピンのマリラに派遣された従軍看護婦の林民子さんは、戦況が悪化すると山地に撤退した。爆撃に追われ、裸足で死体を踏み越えて逃げた。カエルや蛇を食べ、夜は地面にバナナの葉を敷いて寝た。下痢で衰弱した同僚から『人間の骨が効くそうだから、焼けた跡からとってきて』と、頼まれたことも。やせこけて生理も止まり、栄養失調で倒れる人が相次いだ。生き延びられるだけ生き、敵が来たら自決することにしており、誰も彼も疲れ果てた9月の中頃、敗戦を知る。降伏後の3カ月の捕虜生活を送ったのち帰国した。真っ先に日本赤十字社に帰国報告にいくと、林さんたちの姿を一瞥した日本赤十字社職員の口から出た最初の言葉は「君たち、貸与した制服はどうした？飯盒、水筒はどうした？」という員数調べだった。林さんは「私の命より貸与された官物が大切」だったのだと手記に残している（編集子は・官物は天皇陛下からの預かり物と教育されていた）

★民間病院も軍に接収★

太平洋戦争末期。当時青森県の大湊に海軍病院があり、艦砲射撃をうけて危なくなることを考えて、秋田赤十字病院で負傷兵を受け入れることが決まると、その日手術した患者も含めて一般の患者を追いつ出し、一夜にして軍の病院に変わったという。その時看護学生であった方の話によると、軍の病院になった途端、それまで不足していた包帯、ガーゼ、薬、食料などが届き驚いたそうだ。軍事優先になれば、一般市民はもとより、患者さえもかえりみられなくなってしまう。戦争中は多くの病院が軍病院として接収されていたので、日本中で起きていたことではないかと思う。

★戦争が終わっても赤紙召集★

戦後、日本赤十字社は、「軍隊を保持しない国においては、奉仕・救護機関として、また文民のための活動をおこなう公共機関の補助機関として」存在すると認められ、国際赤十字への再加盟が承認さ

7

れた。しかし、1950（昭和25）年に始まった朝鮮戦争の傷病兵の救護に北九州地方の日赤出身の看護婦に赤紙で召集が掛けられた。1950年といえば、第2次世界大戦が終り既に5年、平和憲法下での赤紙召集令状が届けられたが、考えられないことだったので、断ろうとした看護婦もいたが「成績がよかったから、喜んでお国のために働いてくれると思ったのに、先頭に立って反対するなど、日赤への恩を仇で返すようなものだ」と、叱責され、結局GHQ（米軍司令部）の命令だからと、強引に福岡県志賀村につくられた。第141国連軍兵站病院に動員され、朝鮮戦線から送られてきた米国の傷病兵の看護をさせられた。その野戦病院には朝鮮戦争で傷ついた多数の米兵が血まみれで横たわり、戦場そのものであったという。

日赤は朝鮮戦争のために献血、募金運動も全国で展開した。そのことに対してリッジウェー米陸軍大將は「日赤は時と物資と人員を供給して熱心な協力を示した」と参戦への賛辞声明を出している。召集の解除後、日赤本社から「国連軍病院の給与、服務内容など機密事項については今後も絶対に口外しないよう注意されたい」と通達があり、当時のことは日赤本社の記録としては残っていないという。

★すでにある戦争協力・動員の仕組み有事法★

2003（平成15）年6月13日に武力攻撃事態対処関連三法が成立し、有事法制の基本法である武力攻撃事態対処法が施行された。武力攻撃事態法は「有事」つまり「戦時」において、国は「指定公共機関」や地方自治体と「相互に連携協力」して万全の措置を講ずるとしている。日本赤十字社はこの法律で指定公共機関に指名された。

★自衛隊法103条★

また、自衛隊法第103条により、自衛隊は病院や診療所を管理し、医療従事者に業務に就くことを命令することができる。改悪自衛隊法はその「公用令書」を明文化し、記載する事項を規定している。こうして自衛隊が病院や診療所など医療機関を直接管理し、医師、歯科医師や薬剤師、診療X線技師、看護師、准看護師、保健師など医療従事者に業務命令を出すことを可能にしている。

さらに、同103条は物資の保管を業務とする民間人に対して保管命令を発することができるとしていた。改悪自衛隊法はその保管

命令に対して「立ち入り検査を拒み、妨げ、若しくは忌避……報告をせず、若しくは虚偽の報告をした者は20万円以下の罰金」また「保管命令に反して物資を隠匿し、毀棄し、又は搬出した者は、6カ月以下の懲役又は30万円以下の罰金に処す」としている。初めて懲役を含む罰則をもって、一般国民に「戦時」における戦争協力の強制を盛り込んだ。医療分野では医薬品や資材、機材の保管が想定される。こうして武力攻撃事態において、その対処の基本計画に従って、日本赤十字社やその他の医療機関が病院施設をはじめ、医師、看護師、薬剤師などの従事者、そして医薬品や資材機材を自衛隊など国が管理・徴用することになる。

★国民保護法★

また、2004（平成16）年6月に成立した有事関連7法の中の「国民の保護のための法律」（国民保護法）では、日赤など指定公共機関の「責務」が規定された。そこでの主要な役割は、日赤本社の発行している「赤十字の動きN0338によると、①医療救援②その他の救援③外国人の安否に関することになっている。①の医療救援は、被災地や避難先での医療救護、病院での収容・看護・治療を行なうことが想定される。②のその他の救援は、救援物資の配布や血液の提供が考えられ、③の外国人の安否調査は、総理大臣および地方公共団体が保有する安否情報の中から外国人の安否に関する情報を日赤が収集・整理して当該国からの照会に対して回答するというものだ。

★集団的自衛権の法制化と日赤等の医療機関の受けとめ★ ★集団自衛権とは★

政府は2014年7月1日の臨時閣議で、集団的自衛権を使えるようにするため、憲法解釈の変更を決定した。集団的自衛権の行使を禁じてきた立場を転換し、関連法案成立後は日本が攻撃されていなくても「国民に明白な危険があるとき」などは、自衛隊が他国と一緒に武力行使できるようになる。「専守防衛」の基本理念のもとで自衛隊の海外活動を制限してきた戦後の安全保障政策を大きく転換するものだ。政府は行使を認める新たな3要件を規定。①密接な関係にある他国への武力攻撃が発生し、国民の生命・自由・幸福追求の権利が根底から覆される明白な危険がある②国民を守るために他に適当な手段がない③必要最小限度の実力行使を挙げている。3要件を満たした場合の武力行使は「憲法上はわが国を防衛するため」と明記した。のやむを得ない自衛の措置」とし、国際法上は集団的自衛権が根拠

★現在の日赤の役割★

赤十字は戦時救護を目的に発足したが、戦時救護を目的とする赤十字国際委員会とは別に、地震や火災・風水害の救護を目的とする国際赤十字社・赤新月社連盟が戦後発足し、憲法9条で武力を放棄した日本は「軍隊を持たない国の赤十字」として、新たに赤十字国際組織の一員として承認された。その国際的配慮を隠して日赤は1952（昭和27）年「軍事救護」を盛り込んだ日本赤十字社定款を制定した。現在、各国赤十字社は赤十字国際連盟や赤十字国際委員会（ICRC）のアピール（要請）があつて国際救援活動にあたることになっている。日本赤十字社は「21世紀の総合戦略」を策定し、その中で「国際貢献」を強調している。

現在5つの病院が国際救援拠点病院」に指定され、それぞれの病院で国際医療救援部が設置されている。国際救援のための要員研修では「戦傷外科セミナー（ICRC主催）」「生物・化学兵器に関する講習会（熊本日赤主催）」など戦闘色の強いものもあり、有事の際との関連性が非常に強く感じられる。

また、2003（平成15）年3月の全日赤と日赤本社の団体交渉において、全日赤の「有事故法の審議が緊迫した状況にあるが、日赤の看護婦を戦争に動員することのないように強く要請する」追及に、日赤本社は「赤十字の諸条約および赤十字国際会議（1965年）で決定された諸原則に則り、日赤として必要な対応をおこなう。従来通りICRCからの要請で難民救済として行くことはある」と回答している。

★今は「災害救護」でも★

ほとんどの赤十字病院は各都道府県の「災害拠点病院」に指定されている。ある病院では職員一人一人に「防災マニュアル」が配布され「有事の際、全ての職員は『召集の有無に拘わらず登院』『登院に際し、自己完結型の対応』」を基本姿勢とするようにと記載されている。病院機能評価を受けるにあたって、各病院の機能や役割に沿った業務の見直しが行なわれ、同病院では「職員の能力評価表」が作成され、「赤十字病院の組織の一員として災害活動に協力すること」が「大きなウェイトを占めるようになっていく。今は平時における災害のための訓練であっても、有事になればいつでも転用できるのが怖いところである。」

毎年行なわれる赤十字病院と自衛隊との合同災害訓練の規模も大

きくなってきた。設備面でもヘリポートや備蓄庫、自家発電設備など有事には必要なものばかりだ。そんな中で職員は現状をどのように捉えているのだろうか。「戦争はイヤだから、戦争に私は行くことはないだろう」と、安易に考えていたり、合同訓練を通じて「自衛隊の人も一人一人はいい人なんだから、自衛隊はそんなに悪くない組織ではない」と感じたり。日々めまぐるしく動く医療現場では、目の前の業務に追われて余裕がない。黙々と働いていたら、集団的自衛権の危険性を知らされないまま、気づいたらそこが戦場だったということになりかねない。その危険性をさらに職場で宣伝し対話を広げていく必要があると思っっている。

★一般・民間医療機関の影響★ ★国民への影響★

以前「有事法制」の学習会で一般の医療機関から「有事の時は、指定公共機関の日赤だけが対象だから、私たちには関係のない話」と言われたことがあった。「指定公共機関とは、「国立病院機構をはじめとする独立法人、日本銀行、日本赤十字社、日本放送協会その他の公共的機関及び電気、ガス、輸送、通信その他の公益事業を含む法人で、政令で定めるもの」とあり、政府が「公共的」と認定すればいくらかでも広がる。つまり、医療現場は公共的施設なのだ。

日本赤十字社だけが対象ではないといえる。また「指定公共機関は必要な措置を実施する責務を有する」と強い言葉で規定されている。この「責務」とは戦傷病者の治療と輸血などであることは明らかだ。「有事だから」と、医療従事者が戦争要員に組み込まれ、医療従事者が徴用され医薬品や医療物資が不足すると、国民に対しては「国の一大事なので医療機関にかかるのは我慢しましょう」となる日がくるのではないかと思えてならない。《※欲しがりません勝つまでは。と、先の戦争では大人から子供までが洗脳浸透させられた経緯がある》

★国民への医療体制崩壊？★

戦争は戦傷病者の治療体制抜きにはできない。戦傷病者を回復させ、再び戦場に送り出すために前線の野戦病院から後方の軍病院まで戦時医療態勢が組織される。自衛隊の中にも自衛隊病院があり、有事の際には稼働ベッドを増やすことも可能になっているが、多数の患者が同時に限られた場所で発生する戦傷病治療は多大な医療要員と施設、物資を必要とする。そこで民間医療機関及び医師、看護師などの医療従事者の動員が必要となり、自衛隊の軍事医療組織に

民間医療機関が組み込まれることになる。これは病院から一般患者を追いつ出すことになるだけでなく、医療従事者を徴用することにより、一般国民の医療体制の崩壊をもたらすことは明白である。

★おわりに★

ある日赤の元従軍看護婦は言う。「私はつくづく考えます。看護職は平和な暮らしの中で、病に苦しむ人々のために看護の技術をもって健康回復に貢献してこそ、本来の使命をまっとうできる。戦争の協力者になり、自分が看護し健康を取り戻した患者を再び戦地へ戻し死なせる道を、二度と歩むべきではない」と。米国の起こす戦争に最大限の協力を惜しまない政府が、憲法を変え、世界中で日米が協同して軍事介入できる体制をつくらうとしている現在、かつての従軍看護婦たちの体験を再びさせられるのではないかという危惧を、抱くのは私だけではないと思う。国際紛争の解決は武力によらず、外交上の話し合いで解決すべく努力するべきだ。これが国際社会の流れとなっている。

集団的自衛権を行使する法律改正に反対し、「日本を戦争する国にするな」「閣議決定は撤回せよ」「憲法をまもれ」の声をあげていきたい。

敗戦国の従軍看護婦でも地位と名誉は国際法で保護され、守られている。満州新京の陸軍野戦病院は数班の看護班に分かれ、敗戦後、掘班の34名は堀婦長以下全員虎林の八路軍病院で救護任務に服していた。厳しく辛い厳冬も乗り越えた翌年6月、掘班はソ連軍の要請で二十二名の看護婦をソ連陸軍病院に派遣した。そして、堀婦長に派遣看護婦連名で一通の封書が届けられた。開封すると。

遺書

二十二名の私たちが自分の手で命をたちますこと 軍医部長はじめ婦長にも さぞかしご迷惑と深くお詫び申し上げます 私たちは 敗れたりとい云え かつての敵国人に犯されるよりは死を選びます たとえ命はなくても 魂は永久に満州の地に留まり日本が再びこの地に還って来た時 ご案内致します
昭和二十一年六月二十一日 散華 以下お名前が記入

※水野晴仁編纂。満州棄民―戦後に始まった悲劇の証言集―より

編集子

戦争はこんなにも惨い

野田 光輝

当時私は8歳、小学校1年生でした。毎日のようB29の空襲があり、やがてそうなるに違いない戦火を逃れるために、生まれ育った名古屋市から知多郡東浦町緒川に疎開していました。8月15日の玉音放送（昭和天皇の終戦宣言）を道路上に座って、訳の分からぬまま聞いていた一人でもあります。大人たちが大声で「戦争は負けた。戦争は終わった。」と泣きわめいていたのを思い出します。おまわり（警察官）や雷よりも怖いと思っていた大人たちが、道路にへたりこんで、大声をあげて泣いていたのです。日本は絶対に負けない、神の国だからと言っていたのに負けたのです。しかも現人神（あらひとがみ）天皇陛下）その人が、「耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍び。」と神民（臣民）国民）に直接、詔勅（天皇が意志を告げる文書）をのたまわって（伝えて）いるのです。

多くの肉親が同胞が、神の子として天皇陛下に命を捧げ死んでいったのです。日本が負けるということは全く信じられないことです。戦争の悲惨さは数多く、本や映画に記述されています。天皇は神であり、軍の上官は天皇である。天皇の言動（命令）は絶対であり、それを拒否したり反論することは許されません。君命に従わなければ、反逆罪であり、極悪人のレッテルが貼られ、住む町で生活できなくなり、もの心つく頃から、そういう環境、例えば、どここの家でも神棚や仏間の部屋には、その上に天皇・皇后の御真影（ごしんえい）写真）を掲げ現人神として敬い、大和魂の源（みなもと）にせよ日本人の精神力になると教え込まれていたのです。

そうした日本で生まれた私たちのほとんどが、それを疑うこともなく、育てられ「日本は神の国」と信じて成長しました。だから、私たちは「神の子」ですから、たとえ他所（よそ）の国と戦争をしても、「絶対に負けない」「死ぬことはない」のです。何故戦争をするかは、神様の思し召しで全く知らされないし、ましてや侵略などとは神の子は知る余地もなかったのです。赤紙（軍隊に入隊せよの通知書で召集令状といった）が来ると、神兵（本当は神ではなく新兵）として誰もが勇躍し、町内の皆さんの歓呼の声に送られて皇軍（天皇陛下の兵士）として出征（出兵）したのです。

太平洋戦争以前から戦争の悲惨さを国民に隠し、神格化された社会情報が流布されていたため、「お国のために死ぬ」ことは「天皇一

陛下への最高の忠義」と、「死んで守護臣・守護神」になることを誇りとまで洗脳されていたのです。太平洋戦争が末期に近づく、ようやく国民の間にも、何となく「赤紙が来たら二度と生きては戻れない」という悲壮感が流れ始めました。それでも、千人針（手拭い程の布に千人の女性が一人一個赤糸で結び玉を縫い付ける。硬貨の五錢玉を縫い付け四錢しせんし死線を越えたと語呂合わせを信じ、両端に紐を付け腹に巻いた）を身に付けておれば、敵の弾丸もはね返さず。敵は鬼畜だから捕まるとなぶり殺しにされる。女は特に素っ裸にされて辱しめを受けた上、晒し者にされる。アメリカ兵を見つけたら竹槍で突き殺せ。日本人であるなら男も女も、万が一敵に捕われるようなことがあったら、辱しめを受ける前に即座に舌を噛み切っても自決（自殺）して大和魂をみせてやれ」と教育されていたのです。

賢くも、神の子たるものが世間に対して恥ずかしい振舞いがあったてはならない。日本人たるもの万が一のときは、何も言わず自らの手で即座に命を絶て！何も言わずに死ね！と言うのです。当時、日本人の誰もが、こうした風潮というよりは生き様を、国家神道（天皇教）で洗脳され、正しいと信じて疑わなかったのです。こうした世情は戦争を知らない世代の人々にどのように説明しても、きっと理解できない、狂気の全体主義時代だったのです。

人が無知であることが、どんなに恐ろしく悲しいことか。今様にいえば、オウム真理教の有り様を見れば、推察出来るのではないだろうか。オウムは一教団に過ぎませんが、戦争中は日本中がオウム以上だったのでした。大和魂は日本人全員が、オウムのように、日本真理教を信じさせられていたのです。家族も社会も生活、教育の全てが、日の丸、君が代、教育勅語、靖国神社を媒介して、東洋の優れた大和民族が大東亜（アジア全土）にも日本と同じように、天皇陛下の大御心を行き渡らせるのだと。オウムのように催眠術をかけて、疑うことすら許されなかったのです。

戦争で死ぬことが、国を愛し郷土の誇りであり、悲しんだり泣いたりするのは大和魂に背く非国民であり、天皇陛下を最大に侮辱する不敬罪であったのです。戦死する人は天皇陛下を万歳と称え、連戦連勝の報道ばかりで、歪曲された大和魂論が戦争を『惨め』にしてくきました。オウムのマインドコントロールを軽蔑して、自分が歪曲された大和魂（優れた日本人）の催眠術中いることに気付かないのです。平和憲法9条を守りましょう。戦争は全体主義の産物を産

み、人間同士を憎しみ合わせ、互いに殺しあいをさせる怪物です。

敗戦の頃の思い出

敗戦の日、昭和20年8月15日、大府第四国民学校（現〓吉田小学校）3年生の夏休みの最中であった。水遊びから帰ってきたら、なんとなく大人達はションボリとしたような、ホットしたような顔をしており、日本は戦争に負けたのだと知らされた。しかし、なんのこともやらピンとこず、ましてその後どうなるかなど考えもしなかった。

千賀 重安

私は、父親が満州鉄道調査部に勤務しており、中国大連で生まれた。以後ハルピン、新京（現〓長春）と移動し、父親が新京で死亡したため、敗戦前の昭和18年3月、母親の在所である大府に引揚げてきて、現、吉田小学校の1年生に入学したのである。3年生の夏休みが終り、学校に行ったら朝鮮出身の同級生達が、「俺たち勝って、お前等が負けたのだ」と急に威張りだしたのには参った。今にして思えば、私たちはそんなに意識してはいないつもりでも、彼等には日頃の抑圧された思い出がそうさせたのであろう。なぜ朝鮮出身の子ども達が、大勢吉田小学校に通学していたかと言うと、現在の豊田自動織機長草工場や上ノ台一帯は、なだらかな丘陵地帯になっており、ここを飛行場にするための労働力として、朝鮮半島の人達を家族ぐるみ移住させたのである。両親は飛行場の建設作業に従事し、子ども達は吉田小学校に通学したのである。

戦争末期には頻繁に空襲警報が発令されるので、通学団別に一時避難用の防空壕を自分達で運動場の隅に掘った。朝鮮通学団は自分達の両親は土方のプロだという自覚から、日本の通学団に負けない深い防空壕を掘った。あまり深すぎたので雨で崩壊してしまったことを思いだす。当時の吉田小学校の教室は、飛行場防衛のための高射砲、探照灯陣地勤務の兵隊さん達の宿舎になっており、運動場は食料調達のため兵隊さん達が開墾して畑になっていた。飯盒にわずかばかりの米を入れ、さつま芋の葉や茎で増量した雑炊に、今日のご馳走だと言って捕えた蛇を料理して、煮込むのを恐る恐る見ていたのである。

長草の飛行場には、大府駅から終山（ひいらぎやま）を通過して資材を運搬するためのレールが敷かれ、日に数本の列車が走っていた。

。今は、レールの跡はかなりの部分が道路になっている。また、終一山には飛行場守備隊の本部があり、一時、防空壕跡の陥没が問題になったこともある。戦争末期には、若者だけでなく近所の友達の父、親達も出征していき、出征兵士の見送りや、出征家族の家の農作業、手伝いなど、小学校低学年の我々でさえも、結構多忙な毎日を過ごした気がする。

敗戦後の食料難では弁当を持ってこれず、学校給食の粉末ミルクを割り当てる一杯飲んでそっと出ていく級友や、名古屋方面から来たと思われる野菜泥棒の上品なおばさんと目が合った時のやりきれなさ。子ども心にもいろいろな強烈な思い出を経て、西欧諸国に追いつけ追い越せと頑張り、やがて飽食の時代を迎えた。戦後70年を振り返るとき、人と人の争い、殺し合う戦争というものの空しさ、悲しさを深く思う。そして、平和というものの真の意味と有り難さを今更ながら痛感し、辛く悲しい戦争の思い出を風化させないよう語り継ぎたい。

踏みしめられた人間性

小川 雅康

枕元に防空頭巾、寝間着に着替えることもなく、着のみ着のまま寝床に入る。十分な睡眠を約束されることもなく、辛い毎日毎晩の連続だった。空襲に怯え寝つけないままいつも思い出すのは、戦争前のお菓子屋さんで交わした、おばちゃんとの楽しいやりとりだった。「おばちゃん一銭ちょうだい」「またマコロンかい？」「あいよ」と、新聞紙を四角に切って作った三角袋に手際よくマコロンを入れ、「一つオマケ」と言って渡してくれたおばちゃんのこと。三角袋をポケットに押し込んで、マコロンを口にはほばった時の、落花生の香ばしい香りが口一杯に広がった時の満足感を、臍げに思い出して眠ろうと焦るのであった。

寝るときはいつも姉とお菓子の買える日が又来るだろうか？。警戒警報、空襲警報のない日が来るのだろうか？。布団の中で泣く泣く話し合った。「お菓子が買える」と云うのは当時ものない時代で、子どもにとっては平和そのものの象徴であったように思われてならない。夕日が沈むように目に見える勢いで最初にお菓子や食料。色々な生活物資も逼迫の度を増し、学校生活にもいろいろ変化が現れ始めた。学校にも憲兵が入り込み、児童の学校生活にもいろいろな制約が加わり、学校の「あの場所」には絶対に近づいてはいけ

ないとか、何か秘密めいた不穏な空気に包まれていた。

来る日も来る日も硬い運動場を掘り起こし、塹壕と称する深さ一メートルほどの溝を掘り、食料増産だと運動場を畑に開墾しサツマイモの栽培。勉強とは縁のない学校生活の毎日であった。しかし、ひもじさに逆らえず、パン半斤に釣られ何に使われるの判らない木材運びをしたり、モッコで土運び、小学生にしてはかなりきつい労働を強いられたことは、忘れることは出来ない。学習らしきことは殆どなく、理科の授業はモールス信号と手旗。体操は木剣で紅白試合。子ども心にも、こんなことで算術や国語はやらなくてもいいんだらうかと心配にするほどだった。

戦争が長引くと「贅沢は敵」「ほしがりません勝までは」の標語ができ、戦争はお金がかかり、鉄の鍋釜で軍艦や砲弾、弁当箱のアルミで飛行機を造ると貴金属、金属の供出が命じられ、お寺の釣鐘や火の見櫓の半鐘も回収され、子どもは供出された貴金属、金属の分類をさせられ、「あそこの家は隠しているとか、少ないとか大人のトラブルに発展し、憲兵に告げ口するおばさんもいて、「とんとんとんからりと隣組」の仲好しの歌詞とは反対に供出は悪用され、供出が何度も行なわれ「憲兵」と称する権威の塊のように振舞う軍人が、町内会長と共に供出する金属に目を光らせ、監視する有り様には子ども心にも恐ろしさを感じた。

父親の転勤で半田市に移住したのは6年生の2学期からで、その冬の朝、登校途中に名古屋方面から、黒い灰が雪のように降ってきた光景は、今でもハッキリ目に焼き付いている。大府には防空壕があったが、移住先には防空壕がなかった。父が急いで鉄筋コンクリートで頑丈なのを造り、爆風を防ぐための扉も頑丈なのでなんとなく心強かった。間もなく半田の中島航空機へ空襲があり、一トン爆弾のそれ弾が防空壕から10メートルの近くで爆発したが、家族は防空壕で救われた。半田の空襲は物凄かった。爆弾の空を切り裂く落下音。着弾の振動と爆発音は恐怖そのものであった。

近くに中島航空機の女子挺身隊の寮があり空襲の標的にされ、傷ついたり挺身隊の女学生達が血塗れになって大勢「助けてください」と泣き叫びながら防空壕へ転がり込んでくるのを見て、もう日本は終わりと子ども心にも思った。空襲の翌日爆弾で殺された馬を解体して配られた。皆バケツを持ち先を争って配給を受けた。沢山の人が死んだので火葬場が足らず、野原や空き地で大勢の人を茶毘に

ふし、炎と煙と匂いが夕焼けの空を一段と染め上げ、今も臉を閉じると、匂い迄もが脳裏に染み込んでいる。戦争の悲しみと辛さ。
生きざるこしと

田邊 泰

暑い夏だった。常滑市で小学3年生の夏休みを楽しみ、蟬とり、とんぼとりで夢中だった。突然、頭上を黒っぽい飛行機が低空飛行をしていった。後で教えてもらって分かったことだが、アメリカのグラマン戦闘機であった。木陰から見た戦闘機は、操縦席も見え、そのときは格好よく見えた。次の日、庭先で飼っている鶏に餌をやっているときだった。聞き覚えのある飛行機の爆音がしたと思つた瞬間、バリバリと物凄い音がした。私は反射的に家の中へ逃げ込んだ。この機銃掃射で近くのおばあさんが殺され、改めて、戦闘機の空襲、機銃掃射の恐ろしさを知った。小学3年生であつた私は、戦争の恐ろしさや戦争の残虐らしさが何であるか理解できなかった。だが、グラマン戦闘機の機銃掃射で、おばあさんの「貴い命」が奪われたことが、私の戦争体験として残っている。

【その一】敗戦

昭和20年8月15日、夏休みなのに学校へ行つた。何のために何をしに行ったか定かでないが、その日裏山から海を眺め、ああこれで戦争は終わった。水平線の向こうからグラマンは飛んでこないのだと安心した。灯火管制下の生活、防空壕の生活、上空を通過するB29の無気味さ、空襲に燃え盛る名古屋方面の恐怖などから解放された。

【その二】野菜づくり

戦後の食生活は、小学3年生の私にも判るほどの苦しみだった。父はサラリーマンで農地を借りて、麦、野菜、いも類、豆類を栽培した。麦の脱穀を夜玄関先でやった。ご飯は、米はなく麦飯ばかりであつた。未熟のトマトも私の空腹を満足させてくれた。

【その三】開墾

自宅から4軒ほど離れた知多丘陵にある開墾地を手に入れたが遠い。農具・肥料を運ぶ荷車はガタガタで道も土道でガタガタだ。肥料にする人糞を入れた桶からガタガタ揺れる度に肥がピチャピチャ跳ねだし体にかかり、靴はなく藁草履で切れるし泣きたい思いだが頑張った。樹木を倒し根っ子を掘り出す。知多特有の礫層地（拳程の石ばかりの地層）開墾は半端じゃないのだ。水は近くの池から運び親子6人が生きられた。あの頃の両親の農作業姿が目には焼き付いている。

「その四」買い出し

父の趣味は写真で自慢の愛用カメラが「米」に。必需品以外から「米」に。母の結婚晴れ着も「米」に。小学高学年になっていた私はタンスがガラガラになっていくのを知っていた。餓死する人、栄養失調で死ぬ人がだんだんと増えてきた。あの頃は「生きることの大変さ」は戦争以上だったと思う。食べ物、米も含めて配給制だが、遅配欠配60日以上なので都会では大勢餓死したと聞いた。冷静に考えてほしい戦争は。2カ月も国民に食料を与えないのです。

「その五」弁当

学校給食では味噌汁・イナゴの佃煮が出た記憶がある。主食が出たのかよく覚えていない。家に帰るとサツマイモ・ジャガイモの蒸したのを食べた。そのためか薩摩藩や馬鈴薯は食べようとは思はない。中学校は弁当だった。米のない我が家ではご飯のお弁当など持てなく、皆と同じアルマイトの弁当箱だが中は「いもご飯」で恥ずかしくて、弁当箱の蓋を少しずらして、辛うじて口元に食べ物が入るように、背中を丸めて食べた。級友の米の弁当がまぶしかった。

「その六」結局は：

その一から書き初めて気がついた。詰まる処「食べる」ことしか思い出せない。食料難、育ち盛りであったこと、子どもだったので親の苦勞を、親は子どもに苦勞を見せないように、悟られないように振舞っていたのだった。素晴らしい親に育てられたことに感謝している。私達が味わったあの苦しんだ体験を再びさせてはいけな。世界の平和を心から願って。

勤労動員に明け暮れた学生生活

鈴木 大昭

私は、昭和8年（1933）第三尋常小学校（現Ⅱ共長小学校）に入学した。小学校時代の楽しい思い出として、共和駅から大府駅まで2銭で乗車し映画を見に行った。戦争と云う社会情勢の中で学校生活を振り返ると、昭和12年（1937）小学4年生の時、学校から竹箕（竹製の土砂運搬具）を持って、国立愛知傷痍軍人療養所建設の整地作業に行ったことです。翌年の昭和13年支那事変（日中戦争）戦死した勇士の町葬が、町長以下全町民と来賓多数が、運動場を埋め尽くして厳かに行なわれたことも思い出です。

太平洋戦争が昭和16年（1941）に始まり、翌年の昭和17年、半田農学校に入学し武豊線で通学。車両一面目は男子、二面目は女子と決められ、2学期から英語使用が禁じられ、反米英思想高

揚が一層激しくなり、学生労働力のタダ働きが奨励され、働き手が軍隊へ行つた農家の応援に活躍したり、最も長期奉仕は東浦町森岡地区北側の石ヶ瀬川まで約40〜50ヘクタールの湿地を田圃にする工事でした。食料増産目的で11月から翌年にかけて川の氷を割つての暗渠排水作業は、屈強な土方労働と同じでした。深さ1メートルの溝を掘り松や竹の枝を埋め込む労働です。区の公民館に寝泊まりして入浴は農家に分散して入りました。この暗渠工事に学生100人以上、地元の兵隊に向かない弱い農民30人程でした。

半田市成岩の浅井農機具工場で、旋盤、ボール盤、プレス機など工員として、これらの機械を操作して農機具生産に励み、同じ成岩の尾張製粉や半田の日清製粉で、うどんの製造もやらされた。2年生になると、碧海郡上郷村の寺に寝泊まりして、海軍の飛行場造成に参加。また、遠く、北海道の勇払郡早来町の大型農業機械経営の農家手伝いに文部省令で派遣され、♪北海のはて樺太に斧鉞（ふえつ）おの・まさかり入らざる奥深く♪北斗輝く蝦夷の地に……♪と歌を斉唱しました。

昭和19年（1944）4月から、大高山地区から東海市富木島富田地区にまたがり、三菱航空機組立工場と併設された滑走路で、多くの飛行機の胴体や部分品が牛馬数十台で運ばれ、大勢の人が働いて飛行機を組み立てていました。大府駅からも引込線が敷かれ、鉄道でも運ばれてきて、滑走路より組み立てられた中型爆撃機が飛び立つ雄姿を見て歓声をあげたものでした。大府の農会にも派遣され、農業に関係する生産資材の受入れ・配布・出荷計画・計算などに携さりました。昭和19年12月7日13時半頃、突然大地震が襲い、机の下へ避難しました。頃合を見て外へ出ると防火水槽の水が、地震で大揺れし高い壁まで水が跳ね上がった形跡を見て驚きました。戦争中なのか報道されませんでした。戦争が終わってから東南海地震と銘々したと、知りました。

大府では農産物の野菜・いも類の集出荷が毎日あり、一方農業資材の現在数の計算と、出荷立会いもさせられました。この頃から近くの海まで来たアメリカの航空母艦から、艦載機グラマン戦闘機、空襲、機銃掃射が頻繁に始まり、戦争の恐怖を体験しました。同級生の桑山剣一君と大高農会へ派遣され、熱田神宮の下宮の氷上姉子神社境内で、献穀の大豆の調整をしている時、警戒警報もなく突然空襲警報になり、大勢の人が逃げてきました。東方面から数十機のB29大編隊の大空襲になり、大勢の死者が出ました。翌年の昭和

20年1月13日、三河地震に襲われ、戦争被害の激しさと天災の残酷さに晒されました。日本は神様の国で神風が助けてくれると言っているのに、空襲へ天災も加わり傷心の毎日になりました。

7月頃、追分保育園の北端に爆弾が2カ所、東新町一丁目に1カ所、共和町西畑の鞍流瀬川沿いに1トン爆弾が投下されました。朝日町一丁目地内は焼夷弾が、敗戦までの学生3年間は勤労動員と、時間があれば武豊町六貫山の名古屋大学の農場で薩摩藩や野菜の増産に、グライダーの滑空訓練にも励みました。軍事訓練では竹槍でアメリカ兵を一人でも多く殺せと、空襲の合間にエイヤーとさせられました。考えられない学生生活で、生き残ったのが不思議な時代でした。

わが家が燃えてしまった

井村 正則

昭和16年（1941）12月8日、太平洋戦争が始まった時、私は国民学校の6年生でした。日本本土への空襲が始まった頃は、すでに学徒動員で軍需工場に行っていました。その時の空襲の恐ろしさ、名古屋の大空襲で上空が真赤に染まった光景は、今も胸に浮かびます。日本は沖繩以外はアメリカ軍との地上戦こそ免れました。しかし、空からは日本全土殆どやられたのです。空襲により軍人に限らず、日本人全てが地獄を体験することになりました。

空襲警報が発令していなくても、夜間は家から光が屋外へ漏れないようにしなければなりません。それが灯火管制です。電燈カバーを黒い布で覆い電燈の真下だけ照らし、光の円形を家族して囲むように座るのです。毎晩のように空襲警報が発令され「B29が潮岬を北上中」の警報に、肩まで垂れる防空頭巾を被り、防空壕へ避難したのです。戦争末期には空襲警報に明け暮れる毎日でした。空襲警報を知らせるサイレンよりも早く敵機が爆弾を落とすようになり、明でもありました。それは空襲で日本軍の探索兵器が破壊されていくことの証明でもありました。

B29の空襲で「シューツ」と空気を切り裂く音は爆弾で、「ザーザー」と言う音は焼夷弾、焼夷弾は固まって大量に落ちてくるのです。名古屋は1機10トン爆弾を積むB29の100機以上の編隊大空襲が7回あったと言われています。昭和20年5月17日の編隊大空襲は夜の1回でした。編隊を離れた1機が大府の町を襲ったの21-

です。朝方の4時頃でした。「今晚の空襲は終わったな」と父が言います。いながら防空壕から家に戻ろうとした時、「ザーザー」と火災を起こさす目的の焼夷弾が一直線に屋根を貫いて落ちてきました。畳の上にも玄関にも3カ所で焼夷弾が青白い火を噴いています。備えの防火用水からバケツで水をかけたら消え、又水を汲んでいる間に燃え出して。

父が「蒲団をかぶせよ」と叫んだので、手探りで蒲団をかぶせました。火は広がる一方で、消火を諦め荷物を持ち出すことにして、非常持ち出しと決めた中から2コしか出せませんでした。それでも父は着ているシャツを焦がしながら数回燃え盛る火の海から反物を抱えて軒下まで持ち出しました。しかし受け取る人がいなくて軒も燃えて反物の上に崩れ落ちてきました。夜が明けていたので焼けた家を見ようと、着物、反物、家具も何もかも跡形もなく燃えていました。焦土と化した我が家を見た時、一度に疲れが一気に噴き出てきました。前の畑の向こうの家は燃えず、裏側の用水の向こうの家も燃えていません。何と言うことだと情けなく涙も出ませんでした。

町役場へ罹災証明書を取りに行くことになり、罹災した人が多いのに驚きました。後の調査で37世帯の45棟の民家が全焼、死者3人と発表されました。私は二度と戦争をしてはならないと思う。平和こそが本当の幸せであるとしみじみ感じる。今戦争をしたがる人が増えてきた。戦争で被害を受けなかったシアワセ（幸）な人達と思う。

戦争体験記 良かったこと2つ

あの苦しかった戦争の頃を思いだし、今でも、良かったと思っていることが二つあります。

鈴木 ツヤ

私は、満州（現中国東北）満洲義勇隊開拓団員として、北部満州の齊々哈爾（チチハル）の北にある嫩江（のんこう）という処にいました。主人は、開拓団団長をしておりました。昭和20年（1945）5月の末頃、100人はいいた男子団員の60人以上に赤紙（召集令状）がきて主人も軍隊へとられました。それから2ヶ月半経った頃の8月20日に、日本の敗戦を知ったのです。すると同時に満人の暴動が始まりました。私達は、着のみ着のまま、全員から一つで逃げました。40人程の男は年寄りばかりで、私達女性が

頑張って逃げて、嫩江の日本軍兵舎へ辿り着きました。

一と月ほど過ぎた頃、今度は500人ほどで満州拓殖公社の社宅へ移されました。それからが大変でした。保護援助してくれる国も、人も団体ありません。9月はもう冬の前触れ時雨れるのです。着のみのままなので、兵隊さんが残っていた上着ズボンなど、衣料は何でも体に巻き付けました。毎日事件の連続でした。劣悪な環境と飢餓、栄養不良等々で伝染病が発生しました。10月頃から幼児や年寄りから次々と死んでいきました。私の2歳2カ月の娘も11月1日に死亡しました。拾い集めた板で木箱を作り棺桶にして広い野原の一隅に埋めました。すぐ氷点下20度を越す酷寒の毎日になっていきました。何をどのように書いて辛さと寒さと飢えを表現したらよいのかも判らぬほどでした。

死と隣り合わせで、どうにか冬を乗り越えました、3月になり南下（日本へ近づくこと）の話が持ち上がり、私も名簿に乗せてもらいました。しかし、埋めた子を残して帰る訳にはいきません。何とか一緒に帰りたい。それが出来なかったら私は残る決心をしました。私は、子どもの死後、頼まれて事務所で働いていました。ロシアの兵隊さんも毎日来ていました。言葉は通じなくても、手真似足真似で、親しく挨拶を交わすまでになっていました。

私は思い切って、この職場で一番偉いロシアの兵隊さんに手真似で「埋めた子を掘りだし茶毘にして骨を持って日本へ帰りたいから、茶毘にする薪がほしい」と、頼みました。大方の日本人は通じていないと、最悪を考えて慰めてくれました。次の日、薪を積んだ荷車を満人にひかせてきたのです。私が掘り出すと半狂乱になるからと、他の人達が掘り出してくれました。半年近くも地中に埋めてあり、雨が降っていたら氷づめになり、コンクリートより固くて掘り出せないと言明してくれました。大勢の掘りだし希望者でしたが、凍っていて、固くて私の子どもを入れて6体しか掘り出せなかったのです。掘り出してくれた人が「凍土なので腐敗せず、ろう人形のような顔をしていて、奇麗だった」と、教えてくれました。子どもの骨は無事に持ち帰って、今も鈴木家の墓に眠って私をまっています。く良かったことの一つ目です。

日本へ帰る南下が決まりましたが、途中何が起るか、思いも寄せられぬ事件が発生するか、屋根の無い食料のない場所でも足止めされるか、今迄の体験と経験でこれらを覚悟して、承知しなければ

なりません。健康な人は一人もいなくて、皆自分の体をコントロー
ル出来ない病弱者なので「野垂れ死に」覚悟です。だので、親とし
て我が子をこんな危険に巻き込みたくないのです。引き受けた満人は「安心しなさい」
「偉人」立派な人」に育てます」と言っていました。

子どもの中に3歳の男の子がいました。お母さんが死んで孤児に
なり、保護者がいないので残されるのです。満人にも預けられずと
思うと不憫になり、私が保護者になると名乗り出ました。他の人達
が共倒れになるわよ。と、警告してくれましたが、私は「骨」の我
が子を守ってくれると信じていました。男の子の胸には祖父母の住
所を書いた布が縫い付いてあり、無事届けました。僕が孤児にも残
留孤児にもならなかったのは「お母さんおかげ」だと、セントレア
が出来てから大府が近くなったと、北海道から私の誕生日に孫を連
れて祝いにきてくれます。親子以上の絆で結ばれています。

※この欄は編集子担当しました※
齊齊哈爾・嫩江・牡丹江・記載図



明治08年	新政府	富国強兵	帝国主義	採掘	被害
明治27年	台湾に派兵し	賠償金	軍艦	入	日
明治28年	島民征伐	2コ	師	21年	間要ス
明治28年	朝鮮の都合で	殺害	皇位継承	断絶	ス
明治37年	道権益獲得	露戦	兵規	定外	増強
明治40年	朝鮮合併	戦争	2852	回	死
明治42年	スと武断政治	600名	逮捕	刑	罰
昭和3年	張作霖	大元帥	列車	自演	で
昭和6年	爆破	満州全土	制圧	天皇	優
昭和6年	爆破	満州全土	制圧	天皇	優

私の避難日記

小倉 あやよ

戦後70年、幸に暮らしている現在、あの敗戦後の惨めさが、幻
のように私の頭の中に浮かんできます。今、思い出してみると、昨
日のように思われますが、70年の歳月が流れているかと思うと、
感無量でございます。昭和20年(1945)8月11日、北満へ
現「中国東北地方北部」に暮らしていた私達軍隊の家族、開拓団の
家族の運命が一変してしまいました。11日の早朝、午前3時頃
、部隊よりの伝令で、ソ連と交戦状態に入ったので、直ちに武装し
て部隊に出頭せよ。との知らせがありました。主人も予期せぬこと

で吃驚（きっきょう）しました。

北満の軍隊には、それだけ情報が遅れていたのです。部隊に出頭した主人は、1時間くらいたって再び官舎に帰って来ました。とうとうソ連と戦争が始まったから、家族は直ぐ避難する準備をして、部隊からのトラックを待つようにとのことでした。それから戦争に入ったのだから、女・子ども、どのような運命になるか判らないから、万一の時は青酸カリを飲んで死ぬようにと、私に青酸カリを渡して部隊へ戻りました。これが主人と満州での最後の別れでした。平和な時代に育っている今の人に、戦争で配偶者に青酸カリを渡す怖ろしい時代など、全く信じられないことです。それからが私達の運命を地獄のどん底へと叩き落としていったのです。

牡丹江（ぼたんこう）の駅から午前8時頃、避難列車に乗りました。全く動かず夕方まで車内に閉じ込められたままでした。その間、ソ連機の攻撃を受けました。生きた心地などはありません。夕方になって出発した列車は、咬河（こうか）という駅に着き、その学校に収容されました。そこで8月15日敗戦の詔書を聞きました。今迄張りつめていた心も急にがっくり、涙はとめどもなく頬を流れました。この瞬間に敗戦国民となった私達は、全てをソ連軍の命令のまま動くことになり、飛行機の格納庫に移動させられ、一週間ほどは監禁状態でした。次第に死者が出始め、唸る病人、発狂する人、生まれる赤ちゃん、格納庫の中は人生の坩堝（くわく）そのものが繰り広がっていました。追い打ちをかける様に、夜になるとソ連兵が娘さんを連れ出しに来るのです。皆下を向いて誰が連れ出されたか判らぬ振舞をしました。毎晩恐怖の連続でした。私の前でソ連兵が立ち止まったら、私は素早く青酸カリを飲む準備をしていました。

日にちも時間も判らぬまま、行き先も教えられず出発です。何百人かの行列になりました。満州の道は赤土色で、行けども行けども果てしのない道です。皆顔は無表情、暑さと汗と埃にまみれ真っ黒。夜は野宿、雨に降られ濡れたままで毛布一枚で夜を明かす。魂の抜け殻の集団なのです。背中の赤ちゃんが死ぬし、暑さと疲労で倒れる。戦争に負けた現実を諸に受けているのです。死んだ人も倒れた人もその場に置いて助けることも出来ないのです。朝夕の冷えが身に染み、夜の寒さが厳しくなり釣瓶落（つべんらく）のような、冬へ加速しているのです。この仕打ちには戦争に負けた満州の、日本人が受けた苦しみの序の口に過ぎませんでした。敗戦の翌年10月でした。

満蒙家開拓団

西岡 秀子

私は母に抱かれて満州（中国東北）の遼陽から生後3カ月で引き揚げてきた。母は「もっと北にいたら帰れなかった」とよく言っていた。私も残留孤児になっていたかも知れないとよく思ったものだった。だが北にいた開拓団の人達について詳しく知る機会もないまま過ぎしてきた「大地の子」やテレビドラマ「開拓者たち」で満州開拓地のソ連侵攻時や避難行の悲惨を僅かに知るくらいだった。

昨年（2014年）父の教子だった遼陽小学校の卒業生から「北満開拓団への勤労働員の想い出」という小冊子が送られてきた。冊子によると中学3年生（14歳）の昭和20年6月に勤労働員で鉄驪駅から「韓家開拓団」の部落に行ったと云うことだった。生徒達は各開拓団農家に割り当てられて農作業に励んだと。農家の大黒柱で働く中心の男子は「赤紙」で兵隊にされたのだ。8月13日、本部からソ連軍が攻撃してきたと連絡があり、次の日集団で脱出避難したが、ハルピン迄来たとき先生から「ここから先は各自勝手に行動せよ」と放り出さればらになっただけで帰路を探ぐったと。新京（奉天）と辿り貨物列車に潜り込んだりして、遼陽に辿り着いた時は、友人と2人だけ。栄養失調でふくらはぎは押すとペコンとへこんだという。

鉄驪駅から「老営府開拓団」に割り当てられた同級生（14歳の子供）も、やはり苦勞しながら、全身虱だらけで9月23日友人2人で遼陽にたどり着き、自宅に入る前に親から「静かに着ているものを全部脱ぎこのセメント袋」に入れよと言われ、セメント袋を焼却し虱退治した事、風呂場で2カ月半の汚れを洗い落としてから家に入れてもらえたと書いてあった。

私はこの冊子が縁で開拓団のことを知ろうと行動し、昨年9月に新京や奉天・拜泉等各地の引揚者9名で「満蒙開拓平和記念館」を訪ねた。長野県阿智村に一昨年オープンしたこの記念館は、証言や写真や地図などの資料から多くのことを知ることができた。また、館内職員の方の心のもった対応に「ここにたどり着いた」という安心感を持った。

同行したメンバーの1人は、葛根廟で祖母と従姉妹たち5人を殺されたと云う。葛根廟では白旗を掲げている婦女子の日本人避難民

に、ソ連の戦車14台が襲いかかり、無抵抗な婦女子を戦車のキャタビラでひき殺し、息ある者はトラックの上からソ連兵が撃ち殺し、千数百人が殺されたのだ。戦争が終わり日本も平和になり空襲もなくなったのに満州各所では、婦女子の集団がソ連兵や現地人暴徒の襲撃に追いつめられ悲惨な『集団自決』の証言も数多くあったと。

開拓入植地を示す地図にはビッシリと、よく知っている地名が書き込まれてあった。私の出身地ゆかりと思われる処を探すと、四国村・香川村・香川・金比羅郷などの他に、私の育った海辺の小さな村「鶴羽村」という開拓団も見つかった。満蒙開拓平和記念館訪問から帰って、私の香川県の満蒙開拓の歴史を調べる旅が始まった。

知らなかっただけで、香川県からでも1万人もの人が国策で満州の開拓地へ渡っていた。高松市の田村神社には、高さ9'5メートルの「海外開拓者受難の之碑」が昭和56年に建てられていた。重たい石の扉の中には2000名を超す合祀者のお名前が並んでいた。また、四国八十八カ所巡りの70番札所本山寺には「五河林開拓団」の慰霊碑があることや、栗熊村の分村で村の半数近くが渡満した「樺林開拓団」では、なんとか帰国できた人たちで大山の麓に「香取開拓牧場」を開いて生活していることも知った。

当時、国策で開拓民として27万人が満州に渡り、8万数千人が犠牲になった。満蒙開拓青少年義勇軍の募集で8万4千人の青少年が開拓地に入り、死亡者は2万4千人といわれる。ソ連侵攻以前の5月には、大本営や関東軍は満州北部を見捨てて、新京から以南朝鮮国境地点を守る作戦を立てており、北満の開拓民を初め一般邦人を切り捨てていたことを知らなかったのだ。まだまだあの戦争で国家が国民を『どのように見捨てか』を知らなければならぬ。私以上には安倍晋三氏は歴史の真実を学ばねばならない。総理は「新談話」を出すというが、あの戦争に真摯に向き合わない人には語る資格もない。戦後70年、もうだまされない。

戦争の被害者

伊藤 安治

先の戦争、戦争が終わってからもう70年もたついま、こんな言い方も可笑しいのだが、さてこれをなんと云ったらいいのか、安倍内閣好みの大東亜戦争は論外だが、さりとて太平洋戦争と云うのもアメリカ力製で、日本が長く侵略していた中国戦線のこと欠けている

。そこで、15年戦争という称呼が生まれた。前者は年代的に、後者は地域的に言っているのだから、もっといい称呼ができれば一番いいのだが、そうでなければ、この二つのどちらかに統一できないであろうか。いろいろ呼ばれているのは、なんとしても都合が悪い。これも侵略戦争をばやかすためかと勘繰る次第だ。

さて、その、先の戦争で亡くなった人のことを書いてみたい。初めにお断りするが、引用する数字は様々な食い違いがあるので、大体のところをお受け取り頂きたい。随分前え私はこう書いた。日本人の死没者は約320万人で、うち軍人220万人。これに対して侵略した先々の国で、日本人のために殺されたのは2千万人という。私の知ったのはそれだけで、それ以上のことは長く資料を見ることができなかった。その後、戦没者の6割は餓死しと聞いた。

先頃ある新聞に、ある人の先の戦争についての講演の大意を載せた記事がでていて、アジア太平洋・各地域の陸海軍戦没者という資料が掲げられていた。それによると(単位万人)中国45・6。ビルマ16・5。蘭領東インド9。中部太平洋26・1。南西太平洋24・6。とある。これを見て私が先ず思ったのは、フィリッピンに於ける戦没者が、中国本土に於けるそれより多い事だ。戦争をしていた期間は中国の方がはるかに長いのである。

それについても講演者は語っている。1944年10月、台湾沖に接近したアメリカ機動部隊を迎撃、実際は1隻も沈めていないのに、未熟な搭乗員の誤報によって、「空母19隻、戦艦4隻を撃沈し、機動部隊が壊滅しアメリカ軍は裸でレイテ島に来るのだから、水際で撃滅せよと命令した。ところがアメリカは大艦隊護衛のもとに上陸作戦を強行、日本軍は大敗北をしたのだ。戦没者の数は主としてその結果だ。無謀な作戦はこれまでも繰り返されてきた。ニューギニアでは、標高4千メートル級の山を越えてポートモレスビーを攻略するという作戦のために10数万の餓死者をだした。ビルマからインドのインパールを目指した作戦では8万6千人のうち帰還できたのは1万2千人にすぎなかった。

初めに上げた死者数の内、侵略先の国々の国民の死者数についてはまったく判らず、気になっていた。そこで弟に話したらインターネット調べてくれた。それによると、次の様な数字が判った。これらは全て民間人であり(単位は万人)タイ0・8。シンガポール

・マレーシア10°。インドネシア400°。ベトナム100°。中国1000°。ミャンマー15°。朝鮮20°。フィリピン111°。インド350°。勿論、戦争だから当然、相手国の軍人も少なからず殺傷していることは言うまでもない。だが、圧倒的多数は非戦闘員の民間人であり婦女子も含まれていることだと知るべきである。

では、この悪魔的殺人行為はどのようなようにして行なわれたか、私一人の些細な体験から考察してみよう。平和な中国の天津で3年ほど生活していた。この地方はマントウは街頭でも販売していて主食でもあった。この平和な天津へ突然日本から海を越えて日本の兵隊が上陸してきたが、マントウは小麦粉100%の美味しい味を保っていた。そして日本兵が居座りはじめると小麦粉のマントウに少し雑穀が混じりはじめた。居座りが長引き日本兵の数も増えるに比例し、民間日本人も増え街の要職を支配するようになると、マントウから小麦粉が消え、しまいには雑穀ばかりになった。そして美味しさを引き出してくれていた小麦粉は、日本兵と日本人だけでなく、天津港から日本へ積み出され、遂には雑穀類まで日本へ送られて中国人の餓死者が出るようになったが、日本軍の銃剣を恐れ泣き寝入りするより仕方がなかった。日本に逆らえば殺されるのでなにももしないのを、日本人は従順なお友達と一人よがりしていた。

敗戦後知ったところによると、南京事件や三光作戦にみられるような、民間人大量殺害が各所でなされていた。とりわけ食料を現地調達する日本の方針で大量な略奪行為が軍事力でなされていた。南太平洋戦線では侵略した日本軍がミミズやトカゲを食べ、それでも死者の6割は餓死とデーターで発表している。占領した先々で食料を筆頭に根底こぎ徴発し、非戦闘員婦女子を辱しめ、餓死の危機に晒した行為は、日本国内の食料難からも容易に想像できるし、住民の生命財産を犯した理由で裁かれた南方戦線のB・C級戦犯からも汲み取ることが可能だ。日本の軍隊イコール皇軍、天皇の軍隊が侵略した先々で食料だけでなく、恥ずべき行為：ヨーロッパ系白人女性を含む慰安婦も徴発していた事実、目を背けは平和は語れない。

吸血ダニー

戦争に負け北朝鮮へ侵攻したソ連兵に、日本兵と45歳迄の日本男子は「男狩り」され、戦争で疲弊したソ連の工業、農業の復興労働力だけでなく、シベリア開発（鉄道・道路・石造家屋・ビル・港

宇野 宗佑

灣建設、森林伐採」に投入され、私は北朝鮮からシベリアのタイガ
ーと呼ぶ森林の伐採強制労働をさせられてきた。

誰が詠んだかは知らぬが「伐採は地獄の門の一里塚」恐怖の冬を
生き抜き待ちにまった春四月に入ると「この森林には人間の血を吸
うダニが生息し死に至る」と、ソ連の女軍医が警告しが誰も信じな
い。捕虜達で北朝鮮や満州にいた者も、原野に吸血ダニはいるが「
蚊」「ブヨ」同様吸血はするが死に直結した体験も、見聞も皆無と
言うのだが、長野軍医は「微菌は目に見えませんが」と無関心な捕虜
達に医師として警告を発し、伐採作業地には「人命を奪う猛毒ダニ
注意」の掲示と矢印の下に置かれたビンに、真赤な斑点が毒々しい
グロテスクな「吸血ダニ」の標本が入れてあった。

付近はすっかり春の景色になり、山頂の黒く汚れた残雪も見え、
年越しで漸く本格的な伐採作業体勢が整いつつあり、山頂へ続く屏
風のような岩石に発破を掛けては道を開き、収容所より16キロに
達する難道路工事も完成させた頃には、骨だけにされた400人の
捕虜は、山頂迄の伐採が終わればダモイ（帰国）と騒いでいたが、
山頂に達し、伐採道路の前方に、昼尚暗い大森林が控えているのを
見て、呆然と立ち尽くした。監督のロシア人は「これらの木を伐り
終えるには10年かかる」と、捕虜達は驚き鋸を投げ、鶴嘴の柄を
顎に支えて溜息を吐いた。

私達は声が出なかった。呪っても呪いきれない捕虜の烙印は、い
つ迄もペツタリと背中に焼き付けられているのだと知らされた。山
頂には捕虜の力でトラクタ―小屋、（廁||トイレ）、丸木小屋の
宿舎が建てられ、収容所からこの現場へ要する片道2時間のロスを
ゼロにするのだ。自ら墓穴を掘っていると知りつつ、白樺の杭を打
ち込み鉄条網を張っている。全く不利な条件の下に悩み抜いている
捕虜達なのだ。これなら2年間、地獄の歳月を暮らした「ナザラ」
の方が幾分人間界らしく思った。この山中に熊や狼の遠吠え
と一緒に原始生活強要に甘んじる悲劇は『シノギガタキヲシノギ。
タエガタキヲタエヨ』と言われても、私達にはこれ以上耐えられな
い、発狂寸前の限界に追い詰められているのだった。

過酷なノルマを達成させ重い足取りで帰路の途中突然1人が「ダ
ニ！」と叫び私達は愕然とその捕虜を見詰めた。意味不明語を発し
手当り次第手の届く範囲の物を掴んで投げるのだ「オイ！しっか
りせよ、どうした！」戦友の顔も彼は判別できないようだ。唇の間

から蟹のように泡が噴き出た「引き付けた！」両手を広げ何かを探すように虚空を掴む仕草をしていたが「お母さん」が最後の言葉だった。

四月に女軍医が話した「吸血ダニ」の犠牲者が遂に出たのだ！。体に潜り込んで血を吸うダニも捕虜達は、虱同様に親指の爪と爪でパチンと潰す快感を楽しんでいた。「これで20匹」と。虱より始末に困るのはダニが好むのは「臍」だ。臍の窪みに潜り込み食らい付いているダニは取り除くのが大仕事なのだ。私達はダニと叫んで死んだ「死因」を再度噂をし始めたが、ダニ患者が1人も出ていないロシア人達は日本人の作業拒否の仮病だと、ダニ説を主張する長野、小島両軍医の捕虜に対する健康管理に問題ありと、強行にノルマを締め付ける行為に出てきた。科学的に「ダニ説」の原因が解明できないので死因は「発狂」か「ダニ」か疑心暗鬼なのだ。

春から短い夏になっていた。未知の大森林は私達捕虜へ地獄の魔口を大きく開き待ち構えているようだった。緑を吸い込んだ光線が幾筋も森林の中に流れ込む中。捕虜によって四方に地響きを轟かせ巨木が倒され、巨木が覆っていた上にチラリと青空をのぞかせ、死と隣り合わせの伐採音が響く度に、森林に青空が広がっていくが、近頃その速度が著しく低下しているのである。倒された巨木の枝は打ち払われ、その場で葉と共に枯れダニの巣窟になり、千古の森林は毎日骨と皮の捕虜によって丸裸にされ、汗みどろに斧を振る捕虜へダニが吸い寄せられ、突然発作を起こさせ翌日「死」危く一命を取り留めても、手足の自由を奪われ「ダニ脳炎」と恐怖の「新病名」で呼ばれる猛威をふるっていた。

「ダニ脳炎」で、スウーチャン地区伐採のノルマの低下に驚き、ソ連は軍医少佐を調査によこした。吸血ダニの生態を調べていた小島軍医がソ連軍医に「ダニは雨の日は少なく、枝打ちした枯れ葉の下に多く、人間の体臭を感知し樹上からも落下。捕虜待遇の飢餓食による栄養失調と免疫力の低下に合わせ、囚人同様の希望なき生活による諸悪条件が相互に作用し、個人差でダニ脳炎が発症する」と解説し。更に「発疹チフスの伝染解明した医者は、虱を何万匹も調べ、伝染源は虱だと突き止めた。日本人捕虜がシベリア沿海州森林に生息するダニに「ダニ脳炎」と新病名を付けたが、これから軍医を案内する森林には簡単に集めることのできるダニが何万匹も生息している。是非捕えて「ダニ脳炎」を解明して戴きたい」と、巧みにソ連軍医に「下駄を預けた」。

小島軍医がソ連軍医を伐採地のダニ棲息地へ、視察を提案し連れ出しに成功すると、待ってましたと通訳兼務の大塚副官が反応するかのよう。「中隊長、私が試験台になり地獄谷へ案内します」申し出た。すかさず小島軍医が「地獄谷か最適の場所だ！」と感嘆詞。私達3人は強烈な腋臭（ワキガ）のソ連軍医に笑顔を振りまいた。

「地獄谷」誰が付けか不明だが、この森林で一番多いダニの生息地なのだ。1時間以上歩き赤土の急な坂を上りガサガサとうづ高く落ちた枯れ葉を踏み、胸まである雑木や雑草を掻き分け、赤松、縦の樹林、私達3人はダニ出没場所の予備知識があるだけに余計な心労も加わり、汗で濡れた半袖シャツと発散する体臭。湿地が多く夏の今はぬかるんでいて歩くと気持ちが悪く感触。大塚副官を先頭にソ連軍医、少し距離を置いて小島軍医と私、縦一列で地獄谷に踏み込んだ。私はダニの喜ぶ人間4人の体臭、とりわけ強腋臭のソ連軍医に向い、全山のダニが歓声を挙げて降り注いでいる姿を想像していた。

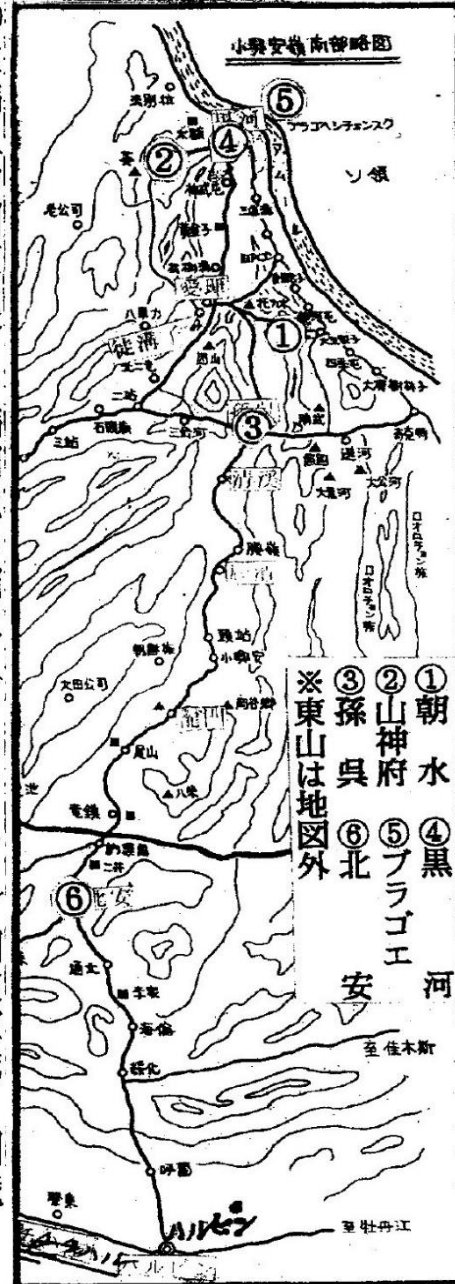
一番方の作業終了班と帰路合流し、衛門で日課になっている「ダニ持ち込み禁止」の裸になりダニ点検儀式を受けた。点検を受ける裸の捕虜の肉体は、断食修業中の御釈迦様を思わせる骨だけで、毛穴一つ一つにダニが噛み、掻いた跡が「かさぶた」になっている。常日頃、ソ連軍医はダニは毛でおおわれた動物だけだ、日本兵はダニを「ズル休み」の口実にしてしていると怒鳴っている。私達4人のダニ点検儀式を取り巻き、楽しそうな会話を待っている。副官、軍医、私の順で10数匹留まりだ。ソ連軍医は背中から腹に黒子（ほくろ）の如くダニがしがみ付いていて、捕虜達はわざとらしい歓声を挙げ驚きを見せた。「ウムー」と唸ったソ連軍医は見ていて可笑しいぐらいの狼狽振りで、あわててシャツを着てベルトをしかり締めた。

見物の捕虜達は興奮していた。すると大塚副官がソ連軍医のベルトに手を掛け腹を露出させ「まだ残っていると」臍を点検させた。臍に2匹いた。人間にはダニ付かないと独善的な態度の少佐も、顔色を変え呆然とした。すると素早く副官が少佐の頬へ往復ビンタをくらわし大声で「少佐落着け、ダニに負けるとあのようになるぞ」と「ダニ脳炎」で死神が憑いた姿の捕虜達の群に指を差していた。

あと幾日、後何年この森林で働かされるのか見当も付かぬ虜囚集団の「長」として、私は吸血ダニ説明より『ダモイ』を要求した。

「戦争体験を語り継ぐ集い」は平成元年から以後毎年夏に開催。夏梅氏の「カ棄民カのあしあと」は第23回（平成23年）戦時体験記録集第13集に初寄稿。前年迄のあらすじ。編集子

■義勇軍・訓練所 ▲開拓団



①北満（中国東北）ソ満国境の朝水（チヨウスイ）関東軍第6国境守備隊歩兵10中隊に現役入隊し敗戦までに4冬体験。守備隊の任務はソ連軍の南下を3時間阻止。この3時間で、関東軍の戦闘準備確保任務の玉砕部隊であった。

②昭和20年6月、山神府Ⅱサンシンフで下士官候補教育中8月9日、日ソ戦。山神府より250キロ踏破し南の孫呉（ソング）へ12日着、孫呉で迎戦布陣。ソ連軍と戦わず15日敗戦、自主武装解除。

③17日初めてソ連軍を見る。カラシコフ連発銃で武装し大型トラックに満載され幾台も歩兵部隊が次々北上に続き、カノン砲、榴弾砲、迫撃砲、自走砲が続ぎ、装甲板70ミリ・85ミリ砲搭載・重量25トンのT34型戦車が幾台も砂塵を上げ北上に、黒河からソ連に凱旋する機甲部隊でなく、ソ連軍に甚大な損害を与え尚激戦中の、6月まで私がいた朝水の日本軍を両方から攻撃する機甲部隊と知る（朝水の日本軍は21日ソ連軍より日本の負けを知らされた）

④時計等ソ連兵に略奪され日本人は今日が何日かも時間も判らず、民間人も多く連行され、2万6千人以上の日本人男子が毎日グループを組織しては解散を繰返し、互いに見知らぬ者同士にされ私は50過ぎたオッサンや痩せた少年など知らない者同士千人位がソ連兵に「急げ！早く！」と徒歩で黒河へ。船で対岸のブラゴエンチェンクス（以下Ⅱブラゴエとする）へ。ブラゴエの寒気は4冬を経験した朝水と同程度なので、寒気の厳しい奥地は御免と、幸いブラゴエに収容れる。

⑤ブラゴエで満州からの日本人が次々と貨車で奥地のシベリアへ運ばれて行くのを見ながらプールになるような巨大穴をいくつも掘

されたり、商店が1軒もないブラゴエの裕福地区、貧民地区を見て、人民を搾取する資本家地主のいない労働者農民の理想郷が建国僅か20年で、貧富の差が現れた実体を知る。

⑥ブラゴエの廃虚大邸宅に收容される。家具調度品電気もなく窓はガラスもなく板で釘付け昼も室内暗黒。屋敷中に張りめぐられていた電線の絶縁覆いを抜き取りローソクの代用に。板の間に体を寄せ合い寝ていたが、秋の無い冬が直ぐ来て死者続出。プールのような大穴は死者で埋まり板の間はガラガラになる。

⑦強制労働は満洲からの略奪物資満載の船舶から荷卸しと整理。8時間の屋外沖仲仕同様の危険重労働に対し、飢餓食に少ない睡眠に加え酷寒、風・南京虫の餌食にされ肺炎・発疹チブス蔓延。医者の診察も投薬も皆無死者続出。年が明け発病一働けない者はいらない」と病人ばかり黒河へ戻される。

⑧黒河はシベリアから追放された病人で溢れシベリア同様毎日大勢死ぬ。人民解放軍の管理下にシベリア同様皆病人なのに、診療も薬も皆無。違いは軍隊の序列も解放軍の監視も、人員点呼もなく三食シャブシャブの粟粥を食べ、自力で御身大切と静養に勤める日課。深夜「大音響」で目覚め今日は昭和21年2月下旬だと判る。大音響は黒龍江が春を告げる解氷音なのだ。2月中旬でも3月上旬でもなく自然は決って2月下旬を選んでいるのだ。待ちに待った春告音に生きる力が湧き出る思に切り替える。

⑨ブラゴエには一軒も無かった商店が江を隔てた満州では、シベリアからの病人日本人相手に食品露天も並び食べ物を売る。流通通貨は解放軍発行の「人民元」戦勝国ソ連の「ルーブル」そして敗戦国日本の「円」。驚くことに敗戦国日本の「円」が一番の力を持ち、政府軍が勢力を持つと「元」は下落し円高で有利になる恩恵？で私は一躍大金持ちになり、病人回復食は露天で選り養生に専念、入隊の時饑餓を下さった人達に感謝していた。

⑩昭和21年4月、露店商の中国人が口を揃え別の收容所の日本人は南の北安へ徒歩で出発と言う。病人が野宿しながら350キロも歩けない死ぬよとも言ふ。南下は帰国の意味だが何度も騙されているので皆信用しないし、350キロ歩く自信もない病人ばかりだ。そして3日後、ソ連から送り込んでくる病弱日本人を收容するため諸君を北安へ移す。歩けないものは馬車、歩けるものは4人一組に一週間分の穀物・マッチ・塩を渡す。自炊と野宿で350キロを1週間で歩くと云うのだ。

※黒河、北安間の鉄道線路はソ連が枕木ごと捕虜に外させバム鉄道(第2シベリア鉄道)建設へ投入。バム鉄道建設は枕木1本捕虜

1 人の犠牲であったと証言あり。

⑪ 夏梅氏は上官風を吹かせないS・国策で満州に開拓村建設に村中で渡満し男狩りでシベリアへ連行発病した農民のF・ソ連軍と交戦もなく無傷の第7国境守備隊員のK、第7国境守備隊は全員シベリアのコムソモリスクで森林伐採、僅か3カ月で半数死亡、残る半数発病黒河へ逆送された1人で中国語に堪能な4人でチームを組み、歩けない病人は50台ほどの馬車に分乗60人の人民軍に守られ4月下旬出發。3日目早くも犠牲者が現れ始めた。Kが人民軍同士の会話だとして1500人以上で出發し、行列の長さは30キロ以上に及び行路死も出ていると、私達は鉄道線路まで捕虜に外させ略奪したソ連を憎んだ。

⑫ Sは一番弱い夏梅氏に合せ歩き、1週間で行程は半分なのに食料は食尽くす。この頃になるとこの4人から離れると「死ぬ」と互いに不思議な「絆」を感じていた。Kが「高騰円」を吹聴し有利に食料を中国人から買い、Fと話し合い日本食に近い調理を振舞い楽しませてくれた。2週間目に北安に着いた。計画通り1週間を着いたのは馬車組の寝たきり病人達で、後日行路死は400人以上と噂が流れた。北安の收容所長は4人揃って最初に到着した私達のチーム力に驚き「病人4人が揃って体力を温存し350キロを踏破したと絶賛」收容所は寝たきり患者に使い働き先に起居し働いて貰いたいと、Sが代表して4人一緒に働きたいと申出、北安軍政学校に起居し炊事をする事になった。

⑬ 建物は日本の全寮制中学の校舎で「校長室」「火の用心」等日本文字がそのまま残り6畳の和室を使用した。シベリアで4人は死ぬなら畳の上でと願望したのだ。私達は毛の抜けた毛布1枚と飯盒と箸だけの荷物を床の間に置き「畳」だと寝転んだ。自分の体に合う調理をして回復に勤め、人民軍の監視も点呼もなく、生徒達は年長の私達に礼儀正しく接し少し人間界に戻った心地だ。順調に体力が回復するのが判るのだ。軍事訓練は日本と同じと思つた。旧式の単発銃ではアメリカの最新鋭武器を使用している国府軍に勝てるとは思えないと4人の評価なのが、次第に人民元が高くなり人民軍優勢が出てきたのに驚く。

⑭ 收容所長の呼び出しで出頭し驚く。收容所は黒河から馬車で送られてきた寝たきり日本人で溢れ、皆虚ろな眼で自失放心状態2月迄の自分と同じと思つた。所長は「君達の軽作業を黒河から送られてくる日本人に与え、君達は炭坑で働いて貰えないか」と、兵隊にされてから今迄自分の考えは封じられ、一方的な命令に動かされてきたのに「命令」でなく「相談」に私達は驚き感謝して承知した。場所は東山Ⅱトンサン。貨車でなく客車の移動にも興奮

した。東山には大勢の日本人が集められ、日本側は日本人の組織を結成し対応した。
※以上前号まで

“棄民”のあしあと

夏梅 誠一

シベリアで病気になり戻された黒河では皇軍崩壊していて、軍隊の階級制も序列もなかつのに、東北人民軍の監視もない炭坑では「天皇の軍隊」が巧妙な形で復活し、次第に重々しい雰囲気発展していった。そんな日々がつづくなか、黒河収容所以来行動を共にしてきたKが、時折出かけたまま暫く戻ってこなかったり、何か考え事でもしている様子が気掛かりだった。そんなKが3交代制の朝、仕事が終わる帰り道「オレ、皆に言うてなかったけど、前からHに勧められていた東北建設隊に入ってたんだ」と言うのでS・F私3人はホウッと声を漏らした。
※HⅡ昭和22年1月頃から日本人側に有利なように炭坑側と折衝する人物。

Kは「まだ入って間がないんで何やってるのかわからないが、Hが言うカ君達の辿り着いた道程をもっと見直してみようカと呼びかけたのに共感したんだ。そういう事ならやってみようと思ったんだ」と呟いた。Kの話を聞いて「そういうもんか」と思った私達は「これからも、また話を聞かせてくれ」と言った。Hと同じ頃Mさんも現れ私達と個人面談をして、体調や労働、悩みや不満、環境等を聞き出し解決出来る事は努力をしてくれるので「さん」付けしていた。Mさんは日本のラジオ放送が聞ける短波受信機を事務所へ持ってきた。それからは電波が伝える今の日本の生々しいニュースやトピックスを知るようになった。

放送は赤裸々に今を伝え、大切な着物をヤミ米と取替え命を繋いでいる人や、B29の大空襲により一家離散した孤児達が、地下鉄の通路をネグラに残飯を漁り強く生きていると報じ、更に外地から引揚げてきた復員兵達が、焼跡の臭いが燻るバラックの間を職を求めてうろついていることも伝えている。そんな中で清廉な学者が配給食品以外は口にする事もなく、餓死した報道は私達に強い衝撃を与えた。そんな中でも正月ラジオでは美空ひばりという7、8歳の少女が、大人の歌を大人顔負けに唄いあげ、庶民がヤンヤの喝采をおくっていた。一方では、隠匿物資のヤミ取引や米軍調達品の横流しなどで車を乗り回し荒稼ぎの連中や、米兵の腕にぶらさがる女が

闊歩しているなど、対照的な生き方をしている者達の話も伝えていた。

そのような脈絡もない混乱ぶりを伝えるラジオ放送から、私達は自分の家族や友人知人が毎日をどのようなに生きているのかなど、考えようもなかった。そんな戸惑いを隠せない私達にMさんは「いま戦われている国内戦を東北人民解放軍が勝利のうちに進めている中で、私達は彼らが目指す国造りの課題について学ばねばならない」と述べ、それと同時に「いま日本でマッカーサーが進めている諸政策（陸海軍の解体、戦犯の逮捕、財閥解体、天皇のマッカーサー訪問、政治犯の釈放、労働組合の結成、総選挙の実施等々）が、日本の民主化を図ると同時に、アメリカにも都合のいい日本の国造りを目指している。私達はそれにどう対処していくかを見極めるためにも、学習を始めなければ」と皆に呼びかけ、資料を持って各寮を回り始めた。そんなMさんの言葉から、皆が故国で生き抜くための学習は、ノートも筆記具も持たないまま、ひたすら講義を聴き話し合うと云うことから始まった。

長い冬を氷に閉ざされた辺境の炭坑の地にも、凍土の隙間からハコベラやヨメナの新芽が吹き出す季節が訪れた。地底の石炭掘りを昼過ぎに終えた私達は、背中に伝わる陽光の温もりに有り難さを感じながら帰路についた。雑木林を過ぎるといつものように視界が広げ、畝った畑に数人の農民と役人の姿が見えた。彼等は目盛りを付けた長い棒で畑の寸法を測って杭を打ち込み縄を張り、区画割りをしてるので、私達は寄り道をして見ることにした。長い棒の目盛りを大声で読み上げ、画板を肩から掛けた男が大声で復唱し記録している。声を掛け合い作業している農民の表情はいつになく明るく生き生き感じられた。

Fが立ち会っているアゴ髭の爺さんに「何やっとなるんやね」と聞くと、「この辺の畑はみんな大地主のものだが、今度のお布令でわしら小作人に分配されることになり、その地割りを決めとるんだ」と言った。私達はそこで初めて大きな土地改革が始まっていることを知った。見学を終え、農民や炭鉱夫達の住居が並ぶ集落に入ると、四つ辻の広場で、ボール紙で作った三角帽子を被せられた大柄の男が、2人の公安に監視され大声で何かを喋っている。行商人が来ただけで15、6人の子供が寄ってくる集落なのに、この場に子供すら姿を見せず無人なのだ。それでも家影や窓の隙間から住民達が息を殺し大男の声に耳を傾けている気配が感じられた。Fが大男はこの地域の地主らしい、長年に亘り大勢の小作人や貧農から作物の

不出来でも強引に年貢を取り立て、彼等を塗炭の苦しみ追い込んだ罪状をお詫びしている。と解説してくれた。

私達は少し興奮し何故か足取りは重く無口になり帰路へ、次の集落近くの空地では、20、30人の男達が村芝居の舞台でもつくるように何本かの丸太を縦横に組み合わせ、その上に板を敷く作業を互いに声掛けをして威勢よく働いていた。いつもなら三々五々数人の炭鉱夫達が石炭を担ぎ帰る姿の他は代わり映えないこの道に、どうして今日に限って思いもよらぬ出来事が続くのかとお互いに首を捻っている。Fが「これはエライことになる前触れかもしれないぞ」と漏らし「あの爺さんが土地改革と言った、この動きは鉾山にも出てくるかも」とするとKが「そのトバッチリがオレ達にも来るのか」と呟いた。いずれにせよ、私達に迫る「改革」という波がどんなものか知らなければと思った。

翌朝の食後、寮長は「すでに仕事の行き帰りに農民や役人達が一緒に作業をしているのを見た人もいると思うが、東北人民政府はこのほど公報により、東北地域一帯の国民党軍の掃討を終えたのを期に、土地改革の実施を公布した」と発表した。「これを受けこの地域においても地主、不在地主所有の土地を政府が没収し、貧農、小作人達に無償で供与する作業が始まった。同時に悪質な年貢の取り立てなどの地主達への糾弾が始まるのを、地域政府から炭坑側にも通告があったことが伝えられたと。

このように今、工人（労働者）農民を主体とする新しい国造りの第一歩を踏み出しているのだ。その成りゆきをしっかりと胸に刻んでおくことは、私達にとっても決して無駄にはならないだろう」と言った。昨日私達が仕事帰りに出会ったあれと、それを巡るいくつかの疑念に対する答えでもあった。そうして農民が作り上げたあの舞台では、地主達からの罪状を引き出し、謝罪させ、糾弾するなかで大勢の農民達が戸惑いながらもこの国の主人公になっていくのか、と言う成りゆきが見えてくるように思えた。

※寮長Ⅱ 東山炭坑に働く日本人10人に1人組長を選び、10人の組長から1人寮長を選ぶ。従って日本人100人に寮長1人となる組織。

貧農、小作人達に対する「農地の無償供与」という東北人民政府の布告は、農民達が長年拭い切れなかった無気力さを一変させ、その変わりように私達は目を見張った。空地に舞台を造った数日後、

二番方に替わった私達は仕事を終え夜の帰り道を急いだ。ところがいつもなら寝静まっている中国人の集落の家々に明かりが灯りガヤガヤ騒がしいので野次馬で見に行った。騒ぎは空き地の舞台前に大勢集り、舞台上の正面には赤い布地に白の切り抜き紙を貼りつけた「打倒蔣介石！土豪（地主）一掃」の横断幕が掲げられ、両脇には何本かのスローガンが下げられていた。舞台中ほどには3、4人の若者に囲まれた上等の服を着た地主らしき人物が「なんとも申し訳ありません」とか「どうかお許しを」などと声をつまらせ何度も頭を下げていた。このやりとりは既に長時間続けられていたようだが、舞台下に座りこんだ農民達からは「そんなことで済むと思うか」「オレの家の飯米、どれだけ取り上げたか返事まだきいとらんゾオ」など激しい怒号が飛んでいた。そんな中、進行役は地主に「早く返事しろ」と迫り、舞台は依然として緊張感に包まれていた。

それから数日後の早朝、私達は鉾山事務所の方から聞こえる大勢の声に目を覚まし、何事かと見に行った。すると事務所のエライさん達と監督面して威張っていた連中が、大勢の中国人工人に囲まれ罵声を浴びせられながらこちらへ向かってくるのが見えた。ただならぬ様子に驚く日本人を尻目を通り過ぎて行った。早朝の眠りを覚まさせたこの出来事は、農民達の土地改革について、この炭坑にも改革の波が迫ってきたことを知らせるもので、最早私達にとっても他人ごとではないと思わせた。翌朝食後、寮長は「今日緊急に出席別集会を開催する」旨を皆に告げた。私達二番方の者は朝食後、舞台と客席のある集会棟へ集合した。そこにはMさんHさんが後ろの椅子に座っていた。冒頭別寮の寮長は集まった100人程の前で、先ず「午後早々出番の組には時間がないので、要領よく会議を進めたい」と前置きし「数日前から貧農、小作人達による土地改革や地主に対する糾弾が続いている。すでに見てきたように、地主達の横暴に抗した農民達が反撃し、それに呼応したこの炭坑の中国人達も立ち上がった。その中で私達は何をするのか、皆の声を聞かせてほしい」と言うようなことを述べた。

すると直ぐに、満蒙開拓青少年義勇軍の者達や初年兵ですぐ捕虜になった連中の何人かが発言を求め、義勇軍だった者は「俺達は15、6で親元を離れ、開拓と軍事教練で絞られ、挙げくの果てシベリアでマリンケと子供扱いにされ、将校や取り巻きの古い兵隊にコキ使われた」初年兵は「俺は満17歳で勅令『天皇の命令』で兵隊にされ、シベリアでは使役だけ一人前に扱われ、夜中や休日にロスケが不意に仕事をさせるときは俺等が割り当てられその結果大勢が

死んだ」すると他の連中が「そうだそうだ、割りの合わない事は初年兵や義勇軍の子供にさせ死に追いやった連中や取り巻きのこの中にのさばっている」他の者が次々と「それはどこのどいつだ」「どこの寮にもいるではないか」「名前を言え」するとアチラコチラから大声でそいつらの名前を挙げ始め、次々と名前を言う者が出た。騒然とした中で仕事の時間が迫り集会は翌日に持ち越された。

前日から始まったこの集会は、かつての初年兵や少年義勇軍隊員たちに、容赦ない使役を強制した連中に対する報復の様相を呈するところとなった。若い男に肩をつつかれ舞台中央に立たされた元将校は、不精髭をのばし一夜にして憔悴しきった顔でうなだれていた。進行役は「どうしてここに引っぱり出されたのか、本人の釈明から聞かしてもらおう」と言った。すると彼は鋭い眼が集中して睨まれている中「：たしかに私は軍隊時代から、勤務割りなどを指示する立場にありました、それは実務を行なう者に一任していたので：」と釈明しはじめた。「なんで俺達や、新兵や義勇軍の子供だけが三日にあげず零下30度以下に引っぱり出されたんや」他の者が「お前と、お前を取り巻く仲間で使役に出た者がいたらそいつの名前を言え」将校は「それは：」と言いかけて口をつぐんだ。すると「デメイのおかげで俺達の仲間がどれだけ死んでいったか：死んだ人達をどう思っているのか言ってみろ」将校は只々「申し訳けないことで：」と頭を下げるだけだった。

すると2、3人の男が将校に向かって駆けよるや1人が「そんなことで済むと思うか」と拳骨をブチカマシタ。集会の群衆から「凍土に埋められた俺等の仲間にどんな面してモノが言えるのか、言ってみろ」と迫られたが、彼は何も言えず舞台に倒されたまま、すっ飛ばされた眼鏡を手探りで探していた。そんな中で私が一番印象強かったのは、同じ寮の同居人でキャップランプを付け監督面して坑内をウロついていたHだ。糾弾の舞台に立たされたHに、取り巻きの新兵が怯えた顔つきで「Hさん、あんたと言う人は：」と言いつと、進行役が大声で「Hさんだと：お前なに甘ちよろいこと言っ」とるんだ」とその新兵を突き飛ばすやHの顔に力一杯往復ビンタを食らわし、鼻血が吹き出たHを「俺と同じように殴れ」と新兵に怒鳴った。体をコチコチにした新兵は「Hオマエは」とカン高い声を張り上げ、顔を真赤にして思い切りHを殴った。常日頃「上官の命令は朕の命令と思え」と嘯いていた上官のHを、星一つの新兵が殴ったのだ。「私はこの有り様を見て、天皇の軍隊は終焉した」と思

翌朝目を覚ますと《傍観的態度一掃》と書いた紙が枕元に置いてあり、次は俺かと身震いしたが「沈黙は許さない」「自分をこまかしている奴がいる」など大勢が標的にされていた。糾弾の集会は1週間続き、糾弾された者はその日の内に公安に連行され、寮には戻らなかった。それから数ヶ月過ぎた頃、検束された彼等が思いがけない明るい顔で寮へ戻ってきた。彼等は私達に対し「私達もそれなりに勉強してきました」と一人一人に握手をして回っていた。

東北地方（旧満州）における解放闘争は、ソ連（ロシア）にほど近いこの炭坑地帯の農民や工人（労働者）達にも、この国の主人公になるにふさわしい変わりようを見せ始めた。この炭坑でも我が物顔に振舞っていたボス共が連行され間もなく、黒服の役人が数人赴任しキビキビと仕事を始めた。先ずは目につきやすい事務所の壁面に「為人民服務」や「実事求是」など毛沢東筆跡の印刷物を貼り、屋内の壁面には新聞切り抜きを掲示したカベ新聞を、屋外軒下には黒板報を設けた。黒板報には出炭目標や実績。それに到達した労働者名や組名の仕事ぶりを紹介。他、生活用品などの入荷案内。各種注意事項。などを報道した。一方カベ新聞には人民日報の切り抜きなど、内戦状況その他のニュースが掲載された。その頃の解放軍は遊撃戦Ⅱゲリラから運動戦Ⅱ機動戦へ大きく転換していた。

それは、アメリカが国民党軍へ供与した膨大な戦車、火炮、車両など解放軍が捕獲し、捕獲した兵器で攻勢に転じたことを大きく報道していることだ。貼られた新聞を読み上げる者や聞く者達は「好ハオ」「好ハオ」と喜び騒いでいることだ。私達の中にも変化が現れ始めた。目障りな連中が公安に連行されて以来、うっとしい空気はなくなつたが、碁や将棋をする者も減り、考え事をしているように見えてきた。そんな中でも東北建設隊の若い連中は元気で「東方紅」や「没有共产党是沒有中国」などの歌を唄ったり、勉強会をやっていた。その頃寮内では週一回7、8人が一組で学習会が始まった。これは東北人民政府がそれぞれの機関に呼びかけ実施したもので「坦白Ⅱタンパク」と呼ばれていた。

自らの罪の告白をテーマにした学習会の目的は、日本人が中国人に加えていた非人間的な行為が、命令であろうと、自主的であろうと、その全てを告白し、参加者相互の忌憚のない批判を受け入れることにあった。私の軍隊生活はソ満国境の「朝水Ⅱチョウスイ」は、一個大隊の日本軍と、物資輸送に雇用した40数名の中国人以外は誰もいない僻遠の地であった。中国人達は穴倉同様の茅屋Ⅱぼうおくに寝起きし垢と虱にまみれボロ服をまとい、どろどろのお粥を

嘸りながら、50〜60頭の痩せ馬を飼い、生きるために力ない足取りで馬車を曳いていた。

荷物運搬の監視役の日本兵のなかには、ノロノロした動作に業を煮やし、快快的「カイカイディ！」（早く早く）と怒鳴り編上靴で蹴飛ばしたり殴る者もいた。監視役は先輩と見習い新兵の2人。軍事的に国境の最前線なので銃は実弾を装填し着剣。監視見習いで判ったことは、国策で渡満した現地召集兵ほど中国人を見下し、自分の父親程の中国人を、満州のご主人様は日本人だと暴力で叩き込んでいた。驚いたが咎めることは出来なかったし、私も2年兵になった頃は当たり前と罪悪感はなかった。と「坦白」した。

私の「坦白」を聞いた皆は「中国人達を非人間的に扱っていた日本軍の行為を今どう思うか」当時日本は『五族協和』『王道楽土』と提唱しながら、反面この非人間的な行為と矛盾を今、どう思うか。また「他の兵隊が中国人を殴ったとき、制止出来なかったことを、今どう考えているか」等々質問されたが、その場では答えられなかった。で、今回の発表に持ち越された。この私の発言に対し、東北建設隊員達から厳しい批判がつづいた。ついこの前までマリンケ（子供）と呼んでいた彼等が東北建設隊員として学習し、あの糾弾集会で自信をつけたのか、失うものを持たない己の立場を知り始めた彼等と、旧来の風潮から未だ脱しきれぬ者達との違いを見せつけられた思いがした。

私達が仕事の往復に通う中国人の集落にもカベ新聞と黒板報が新設された。行商の焼餅（シャオピン）や豚足、葉煙草などの荷を並べた四つ辻でも、読み手と聞き手と解説者達がガヤガヤする風景も珍しくなくなってくるほど盛会だ。戦況は東北地方（満洲）を超え攻勢に転じた解放軍が中国全土を席卷する勢いに、新聞を読む彼等の表情も明るかった。これらは炭坑に要請された「増産運動」にも現れ、工人達の肩にも掛かってきた。「掘進」に入ってから3カ月が過ぎ、私達も炭層のどこへツルハシを打ち込むと効果があると判るようになっっていた。増炭イコール増給料になり休日には街へ繰り出し外食を楽しみ、一杯ひっかけご機嫌で帰る者も増えてきた。

その頃、一番方になった私達へハッパ作業が回ってきた。私は点火担当になり電球とソケットを持ち坑内へ入った。炭層が斜めに走る岩盤に向かって2人が六角の鉄棒を握り、他の2人が六角棒の頭を叩き1メートル程の穴を穿ったのを3カ所。穴に火薬を装填し導

火線を接続し爆破準備完了。他の者が20メートル離れた避難所へ入ったのを見届け私は導火線に点火し発火を確認し避難所へ。爆発音2発確認1発はまた不発かと点火者の私が爆破所へ向かった。すると突如爆発。私はその場にへたり込んだ。炭塵と硝煙の臭いが鼻をつく真暗の中、左足首に灼けるような痛さを感じた。暗がりを通してながら来た仲間が「どうした」と声かけ、誰かが私の手からソケットを取り点灯。もうもうとした坑内はいたるところに大小無数の岩盤や炭塊が飛び散っていた。もし飛び散る場所に居たらと考える。と今でも恐怖心にさいなまれる。

左足首に当たった炭塊の激痛により、私は一週間ほど休んだ。その間に黒河からの仲間は現場変更を申し出ていた。どうにか歩けるようになり新しい現場は炭車で降りる距離も長く奥深いところだった。掘進の仕事でいつものように炭層中央にツルハシを打ち込み始めていると、頭がボーッととしてきてツルハシを振る力が出なくなりその場にへたりこんだ。意識も薄れ誰かが私の体を支えようとしている後は何も覚えていない。気が付くと地底から地上の草原に寝かされ居てた。現場は有毒ガスが充満していて一番弱い私がモルモット役で、全員避難して命の恩人に格上げされた。

数日しても熱が下がらず怪我人や病人の静養棟へ移された。2、3日は寝たり起きたり食欲もなく、混沌とした日が続いた。ようやく普通の体力に戻りかけた頃、珍しく白衣を着た日本人医者が寮長と一緒に来た。寮長はこの街の炭坑病院跡へ疎開してきた中国医大の先生と紹介した。何年ぶりで日本人の医者に診察して貰えるので患者の顔には安心感が漂っていた。診察した先生は「前に胸の病気をしているね」と言われたので「初年兵の秋、胸膜炎で半年ほど陸軍病院に入院した」と伝えた。もしあのガス中毒以来、胸の病気が再発でもしていたらと、今度はとイヤな予感がした。

熱も治まり体力が戻って来た頃、KとFが「今日は見舞いでなく、頼みがあったってきた」と前置きして「もう直ぐメーデーだ。今年は街のメーデーにも参加して、後は集会棟で演劇やノド自慢、隠し芸などで楽しむ計画で、各寮対抗もあり盛り上がっている。そこで舞台中央のメーデー横断幕の真中にレーニンの肖像を配置して会場を引き立てる案が出ている。そのレーニンの肖像画を誰が画くのかと議論していたら、Mさんが「夏梅さんが適役」と教えてくれた。と言うのだ。と言ってレーニンの顔写真の新聞を見せた。その新聞はブラゴエで一昨年の11月の革命記念日の朝、ソ連の警備兵が見て

いた新聞と同じものであった。突然思いもよらぬ話に私は混乱した。軍隊に入ってから絵筆は無縁になり、ブラゴエでは屈強な労働者同様の強制労働。今、炭坑の地底深くツルハシを振るっている、労働の手と指に、繊細な絵筆を持って新聞全開タテ82センチ・ヨコ54センチの絵は画けないと私の十指が教えているのだ。

混乱する私にKは「イヤむつかしく考えず気楽に、皆も気楽にやっているんだ。楽しみは気楽にやるのが一番、頼むよ」で、無下に断ることも出来ず「やってみるか」となった。手配で頼んだベニヤ板を舞台脇の窓際に立てかけ、新聞全開の模造紙を「水張り」で固定。食器一杯の水に数的墨汁を垂らし出来上がった薄墨水を5センチ幅の刷毛で紙面上から下へ方眼のように塗込む。下を塗込む頃には上部が乾いているので、上からと重ね塗込みを繰り返して、根気よく続けるうちに紙面に濃淡が現われる。いきなりストレートに描くのと違い、この手法を取ったからには手数がかかろうとも続けるしかなく2、3日この作業を繰り返した。

目・鼻・口元など、陰影の強い部分は墨汁液を少しづつ濃くしながら丸筆の穂先を絞りコントラストを付けていく。すると徐々に新聞の写真通りに近づいていくのだ。その頃Fが木匠（ムージャン）を連れ、額縁の寸法と額縁の「絵」に合う色合いの意見を聞きに来て、後日出来た額縁をテストだと木匠が肖像画に嵌めこんだ、私は「なんとか格好がつてきたか」と思い、額縁を外さずそのままと頼み、あの写真の引き伸ばしに集中した。多くの人に慕われ尊敬され、世界中に知れ渡っているこの偉人をどのような表現でできるかを考える暇もなく、描いた肖像にどれだけの仲間達が、カレイニンを感ずるか、と筆先を最注意して動かしていた。翌日、仕上げにかかっている時、MさんとHとKが来て「ホッ、いいのが出来たね」と「これで全体が引き立つ」と喜んでくれた。Kは「ご苦労さん、皆も喜ぶよ。ありがとう」とねぎらってくれた。墨一色の絵に。

メーデー前夜祭では、久しく見なかった演劇が催された。小林多喜二の『不在地主』で劇中の「地主」「番頭」に観客から罵声、野次が次々飛び交い、演劇者が立ち往生するありさまだ。『芝居だから静かに見ようと』誰かが呼びかける一幕もあった。写真展は、大人の背丈ほどのタイヤのトラックター、コンバインが見渡す限りの大平原で収穫する様子。喜びに満ちあふれた農民の笑顔、工場では工員達の自信に満ちた姿を展示し、新生間もない人民国家の将来を垣間見させていた。

完結篇へ向け次号へと続く 夏梅

自分史―少年期は 教育勅語で育てられました

橋詰 四郎

今上天皇の生まれた朝

♪日の出だ 日の出だ

鳴った 鳴ったサイレン

うれしや かあさん

皇太子さま

おんまれ なさった♪

90歳の私がこの歌を今も歌えるのは、徹底した皇国民教育だと思っている。1943（昭和18）年、86歳で死んだ祖母は「天子様は有り難いお方で、生きている神様だから、わしらのような「平民」が天子様を見ると目が潰れる、軽々しく口にすると口が曲がる。」と、大真面目で私を諭しそれを信じて死んでいった。

男尊女卑の封建制土壌で公・候・伯・子・男・貴・華・士・平と、やたら人を序列化し、權威の象徴に、奴隷の子は奴隷で、嫡子外は人権もなく人間の売買が出来た。身分制度下層は「平民」で戸籍に記載され就職・婚姻等の身分証明に活用。それまで「士・農・工・商」に区分され「商」が最下位とはとクレームを付け、今は「死語」の差別語で番外とし「商」を満足させた。

明治新政府制定の「平民」グループがこれまた下位とはと文句を放ち「新平民」の「新語」で不満を和らげ、この差別は敗戦でなくなったが、思想の差別意識は根強く、現在も暗黙の中で厳然と強い思想で『就職・婚姻』の『さまたげ』に晒されている。30代の時、時計商の京都の友人ご夫妻が「差別解放運動」に取り組み、私はたしなめる気持ちで「寝ている子を起すようなことはするな」と、すると奥様が涙を浮かべ「理由のない差別で苦しみ泣いている人達を見もしないで『寝ている』とは情けない」と叱責され『目から鱗』で私も運動に参加するようになり、今私は、日本の「三大差別」は「被差別・ハンセン病・アカ」だと位置づけしている。

私の育った地区は平均的庶民の集団地域で、近くに工場が無かったので工員労働者はいなかった。「調味料、味の素」が始め「耳掻き」「杯分で凄い味」だと使っている家は羨望の的にされ、「ラジオ」「新聞」を購読している家は数えるほどだった。冬の朝は路地の空き地で、誰かが炭俵を燃やし、それに廃材を継ぎ足し、井戸端

会議をしながら暖を取る習慣があった。その時、8歳の私も何故かその輪の中に居た。「皇后様、今度は男の子をお願い。」と、合掌しながら祈りに近い大人の会話が合った。実に、天皇家は。大正14年(1925)から昭和6年(1931)までに、成子・祐子・和子・厚子様と4人の内親王に恵まれ、6年間に女子ばかり4人が生まれていったからだった。

市役所は6時、正午、18時にサイレンで時を告げ、火災発生はサイレンを連続吹鳴し、更に火の用心の意識を高める習わしであった。今回の誕生には1回なら内親王、連続2回なら皇太子と、サイレンで知らせる通達が出ていた。昭和8年(1933)12月23日朝、焚火を囲み井戸端会議の真っ最中、突如サイレンが朝の冷気を破るかのように鳴り響き渡った。大人達は男子、男子と声を挙げ、合掌し祈っていた。サイレンの音が小さくなっていくと、今度は「もう1回」の合唱になり、サイレンが再び元氣よく鳴り響いた。大人達は皇太子様だと大歓声を挙げ、喜び、踊り狂うとはこのことかと、子ども心に思った。

2度目のサイレンも鳴り止み静寂になったが、焚火の輪はまだ大人達の興奮が覚めぬままであった。その時、何を思ったか私は大人達に「もう1回鳴ったら火事だよネ。ああよかった。」と大声で話しかけた。言った途端、後の大人が「この罰当たり、口が曲るぞ。」と怒鳴り、私の背中を突き飛ばした。私は燃え盛る焚火の中へ前向きで倒れた。助け出されたか、自分で飛び出たかは覚えてはいないが、焚火で霜柱が解けたぬかるみに土下座して、ご近所のみな様1人1人の膝にすがりながら、何度も頭をぺこぺこしながら、平謝りの母の姿があった。

私は2歳の誕生前に父を亡くしている。喧嘩では負けても勝っても、喧嘩の原因も聞かず、喧嘩をしただけで。又、先生に叱られたと判ると、先生様に叱られるようなことをしただけで、裁縫の二尺のクジラ尺で叩かれた。何故かこの時は「火事でなくて良かったネ」と、言っていて、叱りも叩きもしなかった。暫くして、学校で前述の歌を教えられ、この歌を歌いながら旗行列や提灯行列をしながら、神社に参拝し、天皇陛下万歳を三唱した記憶が残っている。

◎登下校は、誘い合うか単独で集団の決りはなかった。

◎学校給食はなく、殆どの生徒は昼ご飯を家に食べに行った。

◎体育館もプールも無く、雨は教室で自習、単行本「猿飛佐助」等静かに読んだ。体操の教科書は無かったと思う。走る、飛ぶ、鉄棒

◎夏2週間海水浴に3年生以上が汽車で2区の海岸へ往復した。白の水泳帽子に、鮫が近づかないように3尺程前垂れが出るように禪して、5メートルの遠泳に合格すると、幅5センチの黒帯が水泳帽子に縫いつけられ、赤旗で囲んだ外側から内側を監視する役を仰せつかり、誇りと名誉とされ合格を競い合った。汽車賃の出せない家の子は学校で自習していた。夏休みは誘い合つて川で泳ぎ、川原の焼けた石に禪を広げて干すと10分ほどで乾くので、乾くと禪で覆面し、皇室のために活躍する「鞍馬天狗」勤王の志士を助ける剣士「アラカン」嵐寛十郎主演映画「遊びに興じた」。

教科書は全科目「国定教科書」全国同じ。全額保護者負担。教科書を持たない生徒もいて、家庭内やご近所同士の払下げ。払下げ先が決まっているから大切に使用と、使う前から言われることもあった。最初に習う文字は「仮名文字」でなく「カタカナ文字」から教わった。習字は2年生から、最初は「ノメクタ」の文字を書いた記憶がある。小4ぐらいから大全科参考書を買ひ、教科書は学校に常に置いて、通学は鞆でなく風呂敷を使っていた。「書き方」現・習字」「唱歌」現・音楽」「図工」現・工作」「図画」現・美術」の教科書を持たない生徒がいた。席は2人掛けで隣りのを見て学習は進められ、唱歌は筆記試験はなく先生の弾くオルガンに合わせ歌い点数が付く。絵具の筆は、日本習字の筆1本で習ひ、評価は全科目「甲」「乙」「丙」の三段階だった。6年生冬の「体操」現・体育「はラクビーで、級長の「中尾」が笛を持ち審判役、1個のボールを50人以上で追いかけるから4、5人居なくても判らず、裏門から抜け出し駄菓子屋で焼き芋を食べる楽しみもあった。

昭和6年(1931)1月17日、政府は、天皇の写真「ご真影」を各学校に御下賜した。暫くして、中に何が入っているかは知らされず「奉安殿」と呼ぶ耐震耐火の建物が学校正門に建立され、その前を通る時は、建物に真向かい帽子をとり、不動の姿勢をしてから、深々と最敬礼をするように、先生も生徒も指導、義務づけられた。男女7歳にして席を同じにするなの、軍国主義の時代で、子どももの頃から男尊女卑の教育。男女別々のクラス編成であり、子ども達は幼児から一目で「男」「女」が判る髪型と服装をしていた。男子生徒の遊び「兵隊ごっこ」は、学生帽を普通被りが「戦艦」横被りは「巡洋艦」後ろ被りが「潜水艦」で、戦艦は巡洋艦に勝ち、潜水艦に負け。巡洋艦は潜水艦に勝ち、戦艦に負け。潜水艦は戦艦に勝ち、巡洋艦に負けるルールで、奉安殿が出来てからは、止まって

最敬礼をする奉安殿前に追いつく作戦が勝敗を決めるようになり、喧嘩も逃げる相手を奉安殿前に追いつくなど、悪ガキは奉安殿を御味方にご利用させて戴いた。

毎週月曜日の一時限目は『修身』という天皇陛下に忠義を尽くす教育。先生は勅語を目よりも高く奉持し、途中出会った者は最敬礼をしなくてはいけない。先生は奉書を高々と掲げ「勅語」と一言。生徒は直立不動の姿勢で頭を下げ、聞こえるのは勅語を読む真面目な声と、生徒の鼻をすすする音の不真面目音が妙に調和して、笑いをこらえつつ拝聴した。1年生から毎月曜日の儀式で、勅語は先生も生徒も諳んじている。先生は卑怯にも、目よりも高く挙げ、生徒の勅語を聞く姿勢を見ながら朗々と諳んじ、読み終わるや欠伸や手足、体を動かした生徒を前に呼び、鞭で叩き皇国民教育（天皇神聖）現人神Ⅱ生きていく神様をした。

兵隊で戦死するのが天皇陛下へ最高の忠義で、最大の親孝行と教えられた。小学6年生の義務教育終了で就職する子も居た。男子は丁稚奉公、女子は女中見習いや性産業へ売られていった。校長先生や病院先生も自転車。病院にも学校にも駐車場などはなかった。入院設備病院は日本赤十字病院で他は医者が病人宅へ出向く往診制。病人は午前中に外来、外来出来ない病人は午後医者が往診に回り、車夫に曳かせた人力車に乗り往診の医者と、自転車に往診鞆を縛り雨天は「カッパ」を着て往診する医者もいた。朝食は麦飯に味噌汁と自家製沢庵ぐらい。沢庵を食べた屁は鼻が曲がるほどの悪臭を放ち、響きものであった。屁をひった奴は起立し「勅語」と叫び、遊び仲間を起立させ、先生の口調を真似して「朕は思わず屁をひった、汝臣民臭かろう、御国の為だ我慢せよ、鼻を摘んで御名御璽」と、勅語を遊びに取り入れ、鬼ごっこにも採用。捕まりそうになると「勅語」で鬼を起立させ、逃げ切る作戦に利用したが、逃げる奴はハアハア息切れで「朕は思わず：：」を朗読し、鬼はその間ニヤニヤ笑いながら静に呼吸を整えていた。

いつの時代も、1人ぐらいアホがいる、教室で臭ってきたと思ったら誰かが「勅語」と叫んだ。私達は反射的にガタガタと音を立てて素早く起立した。担任も「勅語」の大声に直立し顔はうろたえている。「勅語」が終わるや先生は「窓を明けよ」と叫び、窓から身を乗り出して深呼吸をしている。教室を吹き抜けた風で悪臭は飛ばされ、窓を閉め終わると、担任は「他の先生の時は絶対するな」と約束させた。習字の先生は髭を生やし、羽織袴でいつも威厳を保つ

ていたが、次の動作に移る時「ヨイショ」が口癖であった。この時間にアホが勅語と叫んだ。私達はガタガタ椅子を動かし素早く起立した。お髭は何事かと驚きながらも生徒が「勅語」で、不動の姿勢なので、ご自分もあわてて生徒に従い直立不動の姿勢を取った。「鼻をつまんで」が終わるや、烈火の如く怒ったお髭は、起立している生徒を席順に、1人づつスリッパで殴り回った。1クラス50人以上、20人くらい殴り先生は息切れ、半数も殴らず職員室に帰ってしまふ。私達は洗面所と教室の間を走り回り、手拭いやタオルを水道水で濡らし、殴られた奴の頬を冷やし介抱した。

暫くして、始業の初めに担任が「今日で君達とお別れです、先生は台湾の高砂族の子ども達を教えに行くことになりました。」と言われた。先生のお見送りは、私達はそのような知恵が回らず遊びほうけていた。駅で見送ったのは級長の両親と教頭の3人だけで、淋しいお別れであったと級長は、お母さんから聞いたと話してくれた。※占領した国の言語、宗教を無視し神社を建立。君が代斉唱で日の丸を揚げ、宮城遥拝と天皇を拜ませ「私共は大日本帝国の臣民です」「私共は心を合わせて天皇陛下に忠義を尽くします」と「誓詞の言葉」を斉唱させ従わぬ者には「見せしめ刑」シンガポールにも「昭南神社」を建て市長、警察署長等有識者にも拜ませた。

更に暫くして、母から思いがけないことを聞かされた。「お前達は何か先生様を困らすようなことをしたのか?」「お前達のやったことが、警察やお上が知ったら、校長先生や親も警察に連れていかれる。」「騒ぎが大きくなる前に、急いで先生を台湾の山奥へ逃がした。」「と言うのだった。このようにして「勅語遊びは」沈静化していったが、次々と遊びを考え出すのも子どもである。習字のお髭は大の蛇嫌いであることだ。ひたすら野山を歩くだけの春、秋の遠足に「お髭」も引率で参加するものなら、私達は「蛇探しの遠足」だ。蛇を振り回しお髭の周囲を逃げ回る遊びをする。毛皮を満州の兵隊さんに送ると、山裾で全生徒での兎狩りも蛇探しになる。蛇を習字の時間に教室に放つ。などなど相談も、話し合いもしないのに自主的に「お髭」を困らした。

体育館はなく、体育が雨なら教室で自習だった。この時、級長が誰かが明日の習字に使うから、野草の「ドクダミ」十葉を1人10本以上持ってこいと命令した。50人以上の生徒が持ち寄り、教室の後ろに山のように積まれ、悪臭ぷんぷん頭痛するほどの臭いだ。それに耐えたのも子どももの幼稚さかと今は思う。職員室でも話題に、二時限目に入る前担任が、薬草だから教頭先生が欲しいと、終

わったら捨てずに、小使室（今川用務員）に運ぶように。と。習字は硯に水を入れ、背筋を伸ばし、左手は指を揃え机の端に置き、右手は手首を固定し、墨を垂直に持ち、腕を前後して墨を摺る。この時ドクダミの葉や茎も一緒に摺り潰すから、臭いは更に広がる。お髭は黙って、黒板に大きく『蛇』と書き、この字を自習せよと言って、職員室に引き上げてしまう。それとばかり当時流行の「霧隠才蔵」「猿飛佐助」「真田十勇士」など単行本を静かに読む。担任が、習字の先生が言うには、君達は先生が居ると騒ぎ、居ないと静かになる珍しい組だと言っておられたと、話されたこともあった。

記憶で曖昧なのが高等科だ。小学6年生までは義務制だが。その上に高等科が2年制であった。これが義務か半義務か記憶にない。6年生で上の学校へ受験する者10人ぐらい、高等科へ進学しない者10人ぐらい。残りが高等科へ進み、高等科で再度受験する者もいた。4年生か5年生の時「ゴン」と呼ぶ朝鮮半島の子が転校してきた。習字が抜群に上手でクラス一番になった。両親が鉄屑を買ったり拾ったりする仕事だ。お母さんは日本語が苦手でゴンが通訳した。自転車の輪を保持する鋼鉄の針金を貰って、杉の蕾を弾にした。「杉の実鉄砲」を雌竹で作った。小学生の男子は刃渡り5〜10センチ程の「菊一文字」「肥後守」という銘柄のナイフを持ち冬は、Y形の小枝とゴム管と少しの牛革でパチンコを作り、大豆大の小石を弾に山で鴨など狙った。Y形小枝は楓が最高級。牛革は靴屋で切れ端を貰いゴム管だけ買った。株屋の同級生は五寸釘を大量に買いゴンの家の鉄床と塹で釘の頭を切り落し弾に、本体はゴンの父にブレゼントしていた。夏は「モチ」の木の皮を削ぎ取り湧水で洗いながら、静かに叩くと純粹な「トリモチ」だけが残る、蟬や蜻蛉捕りに使った。

どの家も水道は無く共同井戸、小学4〜5年生になると男子は天秤棒で水汲みをさせられる。炊事から風呂水も男坊主の仕事だ。内風呂の家は少なく銭湯が主力。共同井戸は屋根を広く大きく洗濯場にもなっていた。叔父の家が近くにあり私は叔父家の炊事から風呂水も汲んでいた。祖母が「お父さんがいたら汲まされないのに」が口癖だった。力では母に負けないのに「柿の木に縛るから先に行きなさい」の母の言葉に、炭俵の荒縄を持って後から来る母を待ち、抵抗もせず柿の木に縛られ蚊と蟻に責められるのが辛かった。通るオバサン達はマダマダと解いてくれないが、頃合を見計かって解いてくれ、オバサンも母に詫を入れ家に入れてもらえた。

燃料は薪と炭、ガスはなかった。薪に火を移すのは枯れた松葉で「ゴ」とよんでいた。松葉拾い「ゴ掻き」も男坊主の仕事で、遊び場の山で集めていた。沢山集めても軽いので運ぶ苦勞はなかった。オバサンにイボ蛙を捕まえてと頼まれバケツの底が見えないほど捕まえ渡した。夕飯を食べていると外に悲鳴がして同時にオバサンが裸足で飛び込んできて母の後ろに隠れた。同時にオジサンが青い顔を白く息切れでハアハアして裸足で包丁を振りかざし飛び込んできて「殺してやる」と叫んだ。母は「四郎コップに水を」とオジサンに飲ませ、「ゆっくりと殺す理由を言いなさい。私も納得したら殺させてやる」肺病ではないがオジサンは長い間静養している。イボ蛙が良いと聞いて飲ませたのだ。いつもの薬と違う味だと蓋をとった。母は「四郎誰にも言うな」と約束させた。

共同井戸に一番近い家のおじさんは肺病で寐ていて、おばさんと私より年上の女の子との3人であった。母が時々卵を5コお見舞いにと私に持たせた。玄関を開けると結核の甘酸っぱい匂いがして、私はそれを吸うと伝染すると思っていた。夕方この家に知らない和服を着た男が入った。少しして近所の人たちが集まってきた。僕達子どもが「敵」と呼ぶオジサンも来た。「敵」はいつも僕達に威張って「サーカスに売るゾ」と怒鳴るので「敵」と呼ぶようになった。冬になると「敵」は僕を「坊ちゃま」と呼ぶ。小倉木綿の冬服だが私は兄達のお下がり「ラシャ」の学生服だ。首筋や背中がチクチクするので俺もと、言う「お父さんがいないから」で諦めるのだ。「敵」はラシャの学生服に「坊ちゃま」と言っているのだ。

肺病の家から泣き声が漏れてきた。母は私の手を握り「敵」の隣へ移動し「四郎もう直ぐ出てくるから、町内で1番の親孝行の娘さんの顔をよく見ておきなさい」と言った。突然泣き声が大きくなった。「敵」が「今お金を受け取った」と皆に聞こえるように解説した。男と娘が出てきて手をつないで遠ざかっていった。私は「敵」が男をやっつけると思っていたが、なにもしなかった。母が背中を小突くので振り仰ぐと、後ろ姿に合掌していたので私も真似をして合掌した。「敵」に失望した私は「敵」の自転車のチューブの心臓部「ムシ」を取り捨てる報復に努めた。

級長は、小学4年生から高等科卒業まで「中尾」。副級長は入れ代わっていた。中尾は桶屋の1人息子で、走れば早い、習字も絵も上手、歌は上手いし、工作も器用、学業も全科目1番。そして勉強

はせず私とは別の悪ガキのリーダーもしていた。先生が中尾の父に師範学校を受験するように勧めた時。中尾のお父さんが「桶屋の息子は桶屋が一番、桶屋に学士様はいらん。」と、言ったと担任が話したことがあった。

桶屋は表戸を開け放ち土間が作業場で、新品よりも修理の方が多いように、私達は学校の帰り屈み込んで見学し道草の一つにしていた。中尾のお父さんは仕事をしながら良く話しかけてきた。士官学校には志願するな、士官学校は将校になって、人を殺せと命令する威張った人にする。嫌でも丈夫な体なら兵隊にされる。などと独言のように話しかけてきた。仕事場から中尾のお父さんが、藁で作った肩までの深編笠を被せられ、警察に連れて行かれ、中尾が学校を休み、私たちの組は動揺した。どうして捕えられたのか誰も教えてくれない。担任も黙っている。一週間ほどで帰ってきて仕事を始められた。母やご近所の大人達はヒソヒソ話でコワイコワイと話合っていた。私達子どもは何がコワイか判らなかつた。中尾のお父さんは話しかけても、下を向いたまま返事もせず、黙って仕事を一生懸命するだけになった。

遊びは冬は里山に入り、自分達の作ったゴム管パチンコで4、5人が一羽の鶴を一斉に狙い落とし、駅前の鳥屋で一羽15銭で売れた。15銭は大金でお祭りは5銭、正月は10銭のお小遣いが相場であった。映画は5銭。私は「大森林」と言うカラー映画を見た記憶がある。森の中の大きな湖に飛行艇が飛び着水する映画で、森と湖の真っ青さは今でも覚えていいる。夏は川で鮒や泥鰌を捕え。秋は墓石を足場に木に登り、通草（あけび）を取った。おばさん達の子も私と遊ぶので、おばさん達は「Dとは遊ぶな穢れるからと私に注意した。Dは「墓守」の子で土葬なので深い墓穴を掘る仕事をして、死なない人達と思っていた。Dと遊ぶと何故穢れのか母に聞いた。母は「お前よりも洗濯したさっぱりした服を着せてもらっている」と言い「一番奇麗な子」だと言った。

冬の寒、大寒は「寒詣で」と言って夜、各商店が揃って稲荷大明神を巡り、油揚げ・稲荷寿司・かりん糖を供え回る情報を昼間キヤッチし、尾行してかりん糖を失敬。翌日学校へ持参し戦果を報告するのにも遊びの一つだった。墓は土葬。腐った棺の上を歩くと、腰まで埋まることがある。中尾が墓場で斜めに切った雌竹が足に刺さり、化膿して少し跛になった。中尾のお父さんが「俺の息子は親孝

行だ、兵隊に行かなくてもよい体になった。」と喜んだ。父を知らぬ私は跛になっても親を喜ばす中尾が羨ましかった。

6歳の時満州で戦争。子ども心にも兵隊さんが一番偉いと思うような世の中になっていった。♪義勇奉公四つの文字／胸に刻みて鞭を上ぐ／益荒男ナカムラシンタロウ／行くては遠し興安嶺♪の歌を歌った。7歳の時今度は上海で戦争を始め、「爆弾三勇士」♪廟行鎮の敵の陣／われの友隊すでに攻む／折から凍る如月の／22日の午前5時♪我らが上に戴くは／天皇陛下の大みいつ／後ろに負うは国民の／意志に代る重き任♪の歌を行列して高らかに歌い、出征兵士を駅まで見送る数も増え、兵隊に行った家の表札の横に、長さ15幅4厚さ2センチほどの「出征兵士の家」の板を市役所が取り付け、戦死すると『軍国の家』に取換え前を通る時は神社と同じ『札』が命じられ毎週月曜日「教育勸語」教育の身近かな模範教材に取り上げられ、映画館のニュース映画は日本軍が攻め、支那軍が逃げ城壁にひしめき合った日本軍の万歳場面を上映していた。

歌はラジオとレコードだが蓄音器を持つ家庭はなく、ラジオで戦争賛美を流し、国民を洗脳、マインドコントロールした。

♪子ども向けは

♪父よあなたは強かった／兜も焦がす炎熱を／敵の屍（かばね）

と共に寝て／泥水すすり草を食い／荒れた山野を幾千里／よくこそ勝ってくださった♪

♪奥様向けは

♪東洋平和のためならば／なんで泣きましよう国のため／散ったあなた
の形見の坊や／きつと立派に育てます♪

♪母親向けは

心おきなく国のため／名誉の戦死頼むぞと／涙も見せず励まして
／我が子を送る朝の駅♪散れよ若木の桜花／男と産まれ戦場に
／銃剣執るも大君のため／日本男子の本懐ぞ♪生きて帰ると思
うなよ／白木の箱が届いたら／でかした我が子天晴れ（あっぱれ
）と／お前を母は誉めてやる♪

◎男は。天皇陛下のために名誉の戦死をするので、このような歌や
軍歌で「武運長久」と寄せ書きした日の丸を掲掛けし、祝入営○
○○君の幟旗をなびかせ、太鼓にラッパ。金持ちの地区は花火
も揚げた。騒がしく駅まで出征兵士を見送ったが、沈黙のお迎え
が開始めた。

前もって厳しく私語は厳禁、沈黙を守れと言われ駅前に。大人の

女性は全員純白エプロンに幅20センチほどの白タスキに「大日本国防婦人会」と黒く染め抜いた服装で「タスキ」のない女性仲間外れにされ、汽車が到着し暫くすると、駅長に先導された将校が白布に包まれた遺骨箱を胸に広場に現れ、沈黙のまま未亡人に渡され、未亡人は一礼後我が家に向かつて静かに一步を踏み出し、夫の通動した道を奥さんの胸に抱かれて家へ。沈黙の行列から嗚咽が漏れると、軍服姿の「敵」が「靖国に祀られた護国の英霊」だ泣くなと叱咤し回った。新聞、ラジオは「無言の凱旋」と美化、泣かない妻を「軍国の妻」のけなげさと絶賛。月曜日「教育勅語教育」で天皇陛下の御為と教わった。「無言の凱旋」が増えたと「沈黙」から「海ゆかば」を演奏付で歌うようになり、忠君愛国の鏡と称えた。「海ゆかば」水漬く屍／山ゆかば／草むす屍／大君の辺にこそ死なめ／かえり／みは／せじ♪

母が「四郎、お日様が沈むまで帰ってくるな」と私を外に出し、ラジオの音量を上げ「私の家で思い切り泣きなさい」とお迎えに行った。昼だというのに雨戸を閉め押入に隠れ、外に漏れないように泣いた人もいたと聞かされていた。戦争で死ぬことは現人神、天皇陛下を神と戴く日本人の模範であり名譽のことなどで胸を張り誇り、泣くことは天皇陛下への不忠義と烙印を押されるのだった。

イギリスで戴冠式があり朝日新聞社が単発「神風号」をイイヅカ、ツカゴシの操縦士、機関士で給油を受けながらロンドンへお祝い飛行を成功させ、国威発揚と国民を興奮させ、負けじと毎日新聞社が、1年遅れで双発「ニッポン号」で世界一周を宣言、国を埋めた日の丸の／歓呼の中に羽ばたいて／我がニッポンは真っしぐら／6万キロの空を飛ぶ♪♪遠く祖国を幾千里／異郷に暮らす同胞も／我がニッポンを仰ぎ見て／君が代高く歌うのだ♪何故か飛び立つ前に日本中にこの歌を流行らせ見事成功させ、少年の心を大空へ。更に「航研機」なる飛行機が無着陸記録を出すと富士山上空を旋回飛行。空を制する者が世界を制すると、月刊「少年クラブ」の付録も飛行機の組み立てと「官民」して少年達を「少年航空兵」へ見事誘導した。

空ばかり見上げていたら突然、西住戦車隊長が「軍神」と大報道。マスコミも大報道。愛読書「少年クラブ」に「来たれ！少年戦車兵」の大文字。スズキギョスイ。カバシマカツイチの戦争挿絵も少年達を興奮させ、「少年航空兵」「少年戦車兵」「満蒙开拓青少年義勇軍」女子は「従軍看護婦」と少年少女を官民して戦争へ吸い寄せていった。

少年・少女の心を鷲掴みにするカッコ好い制服は今も昔も：少女は『少女クラブ』で「白衣の天使」従軍看護婦へ誘われ。少年は「七ツ釘に桜に錨」の海軍航空兵へ見事誘いだされた。戦争をしかけておいて「非常時ダ！国の一大事ダ！」と国民をマインドコントロール催眠術に。余りにも強烈な手法だったので、まだ術中の人々が戦争をしたがっているようだ。



空ばかり見上げていたら突然、西住戦車隊長が「軍神」と大報道。愛読書「少年クラブ」に「来たれ！少年戦車兵」の大文字。スズキギョスイ。カバシマカツイチの戦争挿絵も少年たちを興奮させ、「少年航空兵」「少年戦車兵」「満蒙開拓青少年義勇軍」。女子は「従軍看護婦」と少年少女を官民して戦争へ吸い寄せていった。



の頃 兵 強 国 富 益 国 考 える

男尊女卑 女性と子供に人権なく、女性選挙権無く、人身売買も法の下で

福祉より軍事費 大黒柱は軍隊に家貧しく
男の汚い欲望へ女性を認めていた国でした

遠い昔でなく、皆さんのお父さんお母さん

お祖父さん お祖母さんが実体験したお話です

肉弾三勇士私7歳の時。
軍国主義一色、この歌今
も歌える。戦争賛美泥沼
長期。20歳8月9日籤
で肉弾兵決め、選ばれた
者即2階級特進、軍神栄
誉礼。「お母さん」と隠
れ鳴咽。恋愛異性も知ら
ぬ多くの戦友出撃生還せ
ず。俺も後からと送り生
き残る90歳の苦悩。

『平和っていいな』
と言うものなら即逮捕
。職場から地域からブ
ルーシートで囲まれ
ず、晒され徒歩連行。
一週間ほどで釈放。家
族諸共「アカ」とレッ
テルを張られ、差別さ
れ隣組からも疎外。

健康週間

娘身賣の場合
當相談所へ御出下
伊佐澤村相談所

役場も人身売買に知恵と力を貸し協力しました



肉弾三勇士の像

八紘一字・東洋平和・大東亜共栄圏建設・五族共和・王道楽土の
スローガンでモデル化された模範国満州国で、他国民日本は何を？
満州国に居住する日本人の生命・財産・名誉権益を守り、有利にす
るため軍事力の暴力を用いた。だから「教えない戦争・隠す戦争」
だけでなく『隠している戦争』もあるのです。

私のしたこと

私は今76歳（1994年）私の話しを言い逃れた、言い訳だ
と言う人がいてもかまいません、皇軍の一兵士は上官の命は『朕』
の命令と同じで行なった事実であり、真実であるからです。

陰地 茂一

◆皇国民政策。

私も、私の父母も、祖父母も、戦争に負けるまで日本全体が、皇
国民教育で育てられました。豊臣秀吉による人を差別する、士・農
・工・商の身分制度は明治新政府になっても廃止されず、皇族・華
族・士族・平民と天皇頂点制度に『苗字Ⅱ姓』のない平民は天皇よ
り苗字を頂戴『氏』とし、我が家も明治3年天皇から苗字を戴いた
子孫なので『天子様』と天皇を有難く思い、忠誠を誓うように教育
を受けました。

憲法は「大日本帝国ハ萬世一系ノ天皇コレヲ統治ス」「天皇ハ神
聖ニシテ侵スベカラズ」と明記。天皇を現人神（あらひとがみ）即
ち、生きている神様として尊び敬い天皇が中心の国家神道、国は一
つ心も一つと全体主義思想へ導き、人が神様にと思ったり、萬世一
系に疑問を抱くものなら官憲が捕え、不敬罪と非国民のレッテルを
張られても、当然と云うように国民を育て上げ、相互監視風潮へと
巧みに誘導しました。

どのようなに誘導したか、誘導教材は、倒幕戦争で死んだ官軍の魂
を供養した招魂社を「靖国神社」に。君が代・日の丸・教育勅語で
天皇は絶対を説き、義勇奉公・忠君愛国と義務教育で徹底し、国家
神道へ誘導のため、毎日の生活の中で、国民に知らず知らずの内に
浸透させ、道府県に一社ずつ戦死した県民の護国神社を建立し、鎮
守様や八幡社も国家神道の末社にし、鳥居の前を通る時は頭を下げ
拝ませ、入営、軍隊へ入る儀式は鎮守様や八幡社に住民総員で「
武運長久」を祈願し「天皇陛下万歳」と、景気づけに花火も五・六
発揚げ派手な雰囲気の入営者を送り出しました。

遠くから天皇を拜む「宮城遥拝」神道以外の信徒も国家神道に吸収し、軍隊で死ぬと無信仰者・仏教徒・キリスト教徒・フイフイ教徒（イスラム）の一種教徒を靖国神社に合祀し、多神教徒の仲間にして神様にしてしまう凄さ。このテクニクで全体主義者に養成。—he 他教徒が靖国神社に合祀されても疑問も抱かせず、名誉と喜び、家の誉れとマインドコントロールされ、疑問視は非国民、国賊とレッテルを貼り地域社会から疎外され、天皇の為に死ぬを名誉と教え、国民は天皇への忠誠と忠義に励むのに、何の疑いも疑問も持たせず、巧みに洗脳されました。私も、私の父母も、祖父母も、これが明治以降、敗戦まで続いた皇国民教育でした。教材は今も健全な形で存在し、有形無形の働きで国民に催眠術をかけているのです。

皇国民政策の目的は天皇を生き神様と崇め敬い「富国強兵」「帝國主義」路線。福祉後回しで軍備へ国民は貧しい生活を強いられ、巧みに相互監視させ、不満や疑問者は天皇に逆らう反逆者として刑罰を受ける人を、国民も国賊と罵るほどに洗脳教育され、私も天皇の為に死ぬのを最高の忠義と信じていました。

◆皇民化政策

皇民化政策とは、資源を求め日本が侵略した国の国民を、日本人同様、天皇の臣下にする政策です。大和民族は優秀でアジアの盟主となり、指導的役割を担い、アジアに君臨するのが大御心である。と教育され、アジアは大和民族が、ヨーロッパはゲルマン民族だと。私も大和民族の一員として、疑いも疑問も抱かず中国東北で命令に忠誠を誓い、任務に精励しました。

上官の命令は天皇の命令で絶対であり、私の任務は皇民化政策に疑問、妨害、逆らう者を密偵を使い捕らえ拷問に掛ける、拷問は天皇の有り難い大御心（おうみこころ）を判らせる為で、何の罪悪感もありません。天皇も東洋平和のため、逆らう者は雑草と同じだから刈り取れと励ましているのです、忠義と正義のため一生懸命、天皇の御心を安んじさせるため任務に励み、精勤章を受けていました。

そのため、捕らえた多くの「日本は帰れの反日・抗日」中国人・朝鮮人・ロシア人を拷問し、生体解剖の教材用や毒ガスの人体実験用にも引き渡しました。

●生体実験。

ペスト・コレラ・チフス・赤痢・梅毒・破傷風などに感染させ、

体の何処に変化が現れたか生きたまま解剖し調べ、感染した部分を培養体にして、もっと毒性の強い細菌をつくる。

●毒ガス実験。

ガラス張りの部屋に毒ガスを送り込み、外から死ぬまでを観察する。女性も子ども実験に使った。

●凍傷実験。

人工的に指先を凍らせ、凍った箇所を叩くと、荒壁が崩れるように肉が落ち骨が現れる、裸で氷点下の外に縛り、何時間生きられるかを調べる。

●距離測定。

等間隔の杭に縛り、細菌爆弾や毒ガス爆弾を破裂させ、距離による性能とか効力を測るなど、実験に使われる者は人でなく「マルタ丸太」と呼んだ。

私は罪悪感もなく、これが私に課せられた東洋平和を達成させ、大御心を安づる任務だと確信し、疑いなど微塵もなくマインドコントロールされていた。

◆戦争犯罪人として裁かれる。

拷問で取り調べた私が、今度は調べられる。拷問の凄さは自分がしているので十分承知している。この恐怖からノイロゼーになり、食欲もなく、昼夜の区別も付かず発狂する者、自殺する者もいたが、私は軍人として命令を忠実に実行しただけで、犯罪であるなら、命令した上官が犯罪者であると確信していた。中共軍は『良心』はないのかと言ったが、命令を実行する兵隊に善悪を考えることは許されないかと反論。殺すなら殺せと自暴自棄になっていた。中共軍は拷問も威嚇もせず、根気良く私のマインドコントロールを解くように接し、私が良心を取り戻すように勉めてくれたが、私自身の体験でこれは畏だと思い負けるものかと頑張っていた。

戦争が終わって10年後、皇国民教育で失われていた私の良心を呼び起し、呼び戻す事件が私の目の前で起きた。私と同じ戦犯がプールのようなトイレに飛び込み自殺を図った、ノイロゼーで思考力のない私には影絵が動くようにしか見えず、驚きもしなかった。監視の中共軍兵士は、私が首に掛けていたタオルを素早くもぎ取ると、自分の目鼻を縛るとドロドロの糞池に飛び込み糞尿の中を捜し廻

り引き揚げ、汚物だらけの体で、日本人の口の中から詰まっている糞を掻き出し、口づけして人工呼吸をした。軍医が看護師が注射を打ち手当てをする、私は静観し「これが明日の俺の姿」と置き換えていた。

軍医が小さな声で「駄目だ」と呟くと、飛び込んだ兵士が亡骸に取りすがり「誰がお前を殺すと言った、どうして俺達の心を判ろうとしないのだ」と号泣したので、この衝撃は私の自己防衛「私の過去をどのように隠すか、どのように言い逃れるか」のノイローゼを吹き飛ばしただけでなく、これ以上嘘は言えない気持ちにさせた。皇国民教育で無くしていた私の「良心」を呼び起こし、呼び戻すキッカケの事件であった。

私はここ、中共軍戦犯管理所に入る前は、シベリアの酷寒・飢餓・重労働・疫病に耐え強制労働を強いられていた。多くの捕虜が死に、凍傷で手足をなくし、眼鏡も壊れ、栄養失調で半死半生の姿で五年後、祖国日本へ捕虜が帰って行ったが、私は「元憲兵」と日本兵の告発で残され、戦犯として戦争が終わって5年後、中共軍に引き渡されたのです。

中共軍はロシアから引き渡された者で、手足のない者には義手義足を、目の悪い者には度を合わせた眼鏡を、病気を治療し、強制労働はなく、食事も中共軍兵士より良い待遇でした、この180度の天国と地獄の違いも「アメと鞭」ロシアが「鞭」なら中共軍は「アメ」で懐柔させる「餌」かと、自己防衛を固くし「勝てば官軍、負ければ賊軍」か、俺は正義のために戦った日本男子だと信じて疑っていませんでした。

私のマインドコントロールが解けるのに10年かかりました。取り調べは強制も、脅しも、脅迫もなく、自発的に自分の罪を認めるまで待つのです。罪を認めることは死刑を認めることになります。認めようと決心すると、寝付かれない日々が続き、工場が建設され、煙突が建つと死体焼場に見え、苦しみの毎日でした。しかし、あの自殺者に対して必死の処置は、私に人間性を取り戻す出来事だったのです。

善悪を判断できる人間に生まれ変わって、人としての罪を包み隠さず告白して、人として死刑になろう、死ぬ時は自殺者の冥福も祈って死のうと思えるようになり、全部告白しましたがちらりと「命

令されたただけだ」が頭に芽生えるのも事実でした。非人間的な命令を受け入れた自分の弱さも認めましたが「時代がそうさせた」と、私の生れた時代を恨み、死刑の呼び出しを待つようになりました。『不起訴』にする。私の犯した罪えの判決でした。『君は苦しい事もあった、しかし自分の力で乗り越えた事によって、被害者中国の立場に立つことが出来た、我々はそのお手伝いをしたただけだ、日本に帰ったら家族団欒の生活をして下さい。君を死刑にしたいだけだ、日本の恨みを晴らしたら、君の家族はまた中国を恨むだろう。我々は平和の為に我慢しますから。』と、言われたのです。

◆満蒙開拓の美名と犯罪の一例。

日本から30世帯の開拓団が来る、これに見合う中国人の農地を取り上げる。取られて不満を言う者は、不平分子として捕らえ拷問に掛け、死ぬと松花江に流し、生きている者は『マルタ』として731へ送り込む。

国策で満州国に日本村開村計画が進められると、例えば面積、京都府ほどの肥沃な広大な穀倉地帯の一部を「治安悪化地区」に指定し「治安安定」まで無人化にすると宣言。この地区「の住民全員を指定地外へ全員退去（追い出し）指定地に進入、残留者は日本に逆らう不穏分子「匪賊」「馬賊」征伐と歩兵、砲兵を動員し討伐作戦を繰り返し、完全無人化にし三年後「治安回復」を宣言し、最初の居住民として、日本の国策農民団を関東軍保護下で定住させた。

満州国臨時国勢調査

1940（昭和15）年10月1日現在

満州人	38,885,562人
漢族・満洲族	
日本人	2,128,582人
台湾人朝鮮人	1,309,000人を含む
白系ロシア他	66,783人

都市名	全人口	その内の日本人
奉天 現=瀋陽	1,003,917	170,580
新京	490,253	129,321
哈爾濱	558,829	51,650
大連	338,872	84,794
安東	246,129	43,358
吉林	145,035	17,941
齊齊哈爾	118,708	14,290

★戦後七十年 戦争終結特集百頁

※通称「日ソ不可侵条約」1941年（昭和16）4月13日

日本国及ビソビエト連邦間中立条約及ビ声名

昭和十六年四月十三日モスクワに於て署名 二十五日両国批准

大日本帝国及ビ、ソビエト連邦ハ両国間ノ平和及ビ友好ノ關係ヲ強化サセヨウトイウ希望ニ促サレ中立条約ヲ締結スルコトニ決シ次ノヨウニ協定シタ。

第一条

両締約国ハ両国間ニ平和及ビ友好ノ關係ヲ維持シ、相互ニ締結国ノ領土ノ保全及ビ不可侵ヲ尊重スベキコトヲ約束スル。

第二条

締約国ノ一方ガ、マタハ二以上ノ第三国ヨリ軍事行動ノ対象トナル場合ニハ、他方契約国ハソノ紛争ノ全期間ニオイテ中立ヲ守ルコト。

第三条

本条約ハ、両締約国ニ於テソノ批准ヲ了承シタ日カラ実施サレ、且ツ、五年間ノ期間、効力ヲ有スル。両締約国ノイズレ一方モ、ソノ期間満了ノ一年前ニ、本条約ノ廃棄ヲ通告シナカッタ時ハ、本条約ハ次ノ五年間、自動的ニ延長サレタモノト認メラレタコトトスル。

第四条

本条約ハナルベク早く批准スルコト。批准書ノ交換ハ東京ニ於テナルベク早くニ行ナウコト。

※隠す戦争 日ソ不可侵条約は連合国の降伏勧告「ポツダム宣言」を日本が無視した時点で無功。これが国際通念だとソ連の見解。

※「ポツダム宣言」一九四五年七月二十六日

一。吾等合衆国大統領中華民国政府主席及「グレート・ブリテン」国総理大臣ハ吾等ノ数億ノ国民ヲ代表シ協議ノ上日本国ニ対シ今次ノ戦争ヲ終結スルノ機会ヲ与フルコトニ意見一致セリ

二。合衆国英帝国及中華民國ノ巨大ナル陸海空軍ハ西方ヨリ自国ノ

陸軍及空軍ニ依ル数倍ノ増強ヲ受ケ日本国ニ対シ最後の打撃ヲ加フルノ態勢ヲ整ヘタリ右軍事力ハ日本国力抵抗ヲ終止スルニ至ル迄同国ニ対シ戦争ヲ遂行スルノ一切ノ連合国ノ決意ニヨリ支持セラレ居ルモノナリ

三。驟起セル世界ノ自由ナル人民ノ力ニ対スル「ドイツ」国ノ無益且無意義ナル抵抗ノ結果ハ日本国民ニ対スル先例ヲ極メテ明白ニ示スモノナリ現在日本国ニ対シ集結シツツアル力ハ抵抗スル「ナチス」ニ対シ適用セラレタル場合ニ於テ「ドイツ」国人民ノ土地産業及生活様式ヲ必然的ニ荒廃ニ帰セシメタル力ニ比シ測リ知レサル程更ニ強大ナルモノナリ吾等ノ決意ニ支持セラルル吾等ノ軍事力ノ最高度ノ使用ハ日本国軍隊ノ不可避且完全ナル破壊ヲ意味スヘシ

四。無分別ナル打算ニ依リ日本帝国ヲ滅亡ノ淵ニ陥レタル我儘ナル軍国主義的助言者ニ依リ日本国力引続キ統禦セラルヘキカ又理性ノ経路ヲ日本国力履ムヘキカヲ日本国力決定スヘキ時期ハ到来セリ

五。吾等ノ条件ハ左ノ如シ
吾等ハ右条件ヨリ離脱スルコトナカルヘシ右二代ル条件存在セヌ
吾等ハ遅延ヲ認ムルヲ得ス

六。吾等ハ無責任ナル軍国主義カ世界ヨリ駆逐セラルルニ至ル迄ハ平和安全及正義ノ新秩序カ生シ得サルコトヲ主張スルモノナルヲ以テ日本国民ヲ欺瞞シ之ヲシテ世界征服ノ挙ニ出ツルノ過誤ヲ犯サシメタル者ノ権力及勢力ハ永久ニ除去セラレサルヘカラス

七。右ノ如キ新秩序カ建設セラレ且日本国ノ戦争遂行能力カ破碎セラレタルコトノ確証アルニ至ル迄ハ連合国ノ指定スヘキ日本国領域内ノ諸地点ハ吾等ノ茲ニ支持スル基本的目的ノ達成ヲ確保スル為占領セラルヘシ

八。「カイロ」宣言ノ条項ハ履行セラルヘク又日本国ノ主権ハ本州北海道九州及四国並ニ吾等ノ決定スル諸小島ニ局限セラルヘシ
※カイロ宣言（要旨）末尾に記載アリ。

九。日本国軍隊ハ完全ニ武装ヲ解除セラレタル後各自ノ家庭ニ復帰シ平和的且生産的ノ生活ヲ営ムノ機会ヲ得シメラルヘシ

十。吾等ハ日本人ヲ民族トシテ奴隸化セントシ又ハ国民トシテ滅亡セシメントスルノ意図ヲ有スルモノニ非サルモ吾等ノ俘虜ヲ虐待セル者ヲ含ム一切ノ戦争犯罪人ニ対シテハ嚴重ナル処置ヲ加ヘラルヘシ日本国政府ハ日本国民ノ間ニ於ケル民主主義的傾向復活強化ニ対スル一切ノ障礙ヲ除去スヘシ言論宗教及思想ノ自由並ニ基本的人權ノ尊重ハ確立セラルヘシ

十一。日本国ハ其ノ經濟ヲ支持シ且公正ナル実物賠償ノ取立ヲ可能ナカラシムルカ如キ産業ヲ維持スルコトヲ許サルヘシ但シ日本国ヲシテ戦争ノ為再軍備ヲ為スコトヲ得シムルカ如キ産業ハ此ノ限ニ在ラス右目的ノ為原料ノ入手（其ノ支配トハ之ヲ區別ス）ヲ許サルヘシ

十二。前記諸目的カ達成セラレ且日本国民ノ自由ニ表明セル意思ニ從ヒ平和的傾向ヲ有シ且責任アル政府カ樹立セラルルニ於テハ連合國ノ占領軍ハ直ニ日本国ヨリ撤収セラルヘシ

十三。吾等ハ日本国政府カ直ニ全日本国軍隊ノ無条件降伏ヲ宣言シ且右行動ニ於ケル同政府ノ誠意ニ付適当且充分ナル保障ヲ提供セシムルコトヲ同政府ニ対シ要求ス右以外ノ日本国ノ選択ハ迅速且完全ナル破壊アルノミトス

※隠す戦争 7月26日何故降伏しなかつた？この日からの日本の悲劇は、人道上許されぬ仕打ちを数多く課せられた。

※「ソ連、対日宣戦布告書」
一九四五年（昭和二十年）八月八日日本に手渡す。

ヒトラードイツの敗北及び降伏後に於ては、日本のみが戦争を継続する唯一の国となった。

三国、即ち、アメリカ・イギリス・支那の日本軍隊の無条件降伏に須関する本年七月二十六日の要求は、日本により拒否されてしまった。よって、極東戦争に関する日本政府のソ聯邦に對し、同政府が日本の侵略に對する戦争に参加し、もって、戦争終了を促進し、犠牲者の数を減少し、かつ急速に一般的平和回復に資すべき提案した。

ソ聯邦は、その連合國に對する義務に従い、連合國の上記の提案を受託し、本年七月二十六日の連合國宣言に参加した。ソ聯邦政府は、このような同政府の政策が平和を促進し、各國民をこれ以上の

犠牲と苦難より救い、日本人に、ドイツがその無条件降伏拒否後にこうむった危険と破壊を回避させる唯一の手段であると考えた。

以上の見地よりソ聯邦政府は、明日、すなわち八月九日より、同政府は日本と戦争状態にあるべき旨を宣言する。

※隠す戦争 宣戦布告を「握り潰し」橋詰の属していた第六国境守備隊は降伏も8月21日ソ連軍から知らされた。平和交渉中の日曜日早朝真珠湾を攻撃してから宣戦布告。奇襲と言葉を置き換えた。

※「ポツダム宣言受諾通知」

一九四五年八月十四日 東郷外務大臣より瑞西（スイス）加瀬公使宛公電

米英蘇支四国ニ対スル八月十四日附帝国政府通告「ポツダム」宣言ノ条項受諾ニ関スル八月十日附帝国政府ノ申入並ヒ二八月十一日附「バーンズ」米国國務長官發米英蘇支四国政府ノ回答ニ関連シ帝国政府ハ右四国政府ニ対シ左ノ通り通報スルノ光榮ヲ有ス

。天皇陛下ニオカセラレテハ「ポツダム」宣言ノ条項受諾ニ関スル詔書ヲ發布セラレタリ

二。天皇陛下ニオカセラレテハソノ政府及大本營ニ対シ「ポツダム」宣言ノ諸規定ヲ実施スル為必要トセラルルヘキ条項ニ署名スルノ権限ヲ与ヘ且保障セラルルノ用意アリ又陛下ニオカセラレテハ一切ノ日本国陸海空軍官憲及右官憲ノ指揮下ニ在ル一切ノ軍隊ニ対シ戦闘行為ヲ禁止シ武器ヲ引渡シ前記条項実施ノ為連合国最高司令官ノ要求スルコトアルヘキ命令ヲ發スルコトヲ命セラルルノ用意アリ

※カイロ宣言とは日本の敗色が間違ひなく濃厚になった1943年（昭和18年）11月27日。北アフリカ「カイロ」に、ルーズベルト大統領・蒋介石大元帥・チャーチル総理大臣の三大同盟国巨頭が、降伏後の日本の処置を決めた集り。紙面上要所のみ抜粋。日本国が奪取し、又、占領したる太平洋に於ける一切の島嶼を剥奪すること、並に満州、台湾、及び澎湖島の如き日本国が清国より盗取したる一切の地域を中華民國に返還することにあり。日本国は又、暴力及び貧慾に依り日本国が略取したる他の一切の地域より驅逐せらるべし。前記三大国は朝鮮の人民の奴隷状態に留意し、朝鮮を自由独立のものたらしむるの決意を有す。

敗戦の詔書

朕深ク世界ノ大勢ト帝国ノ現状トニ鑑ミ非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ收拾セムト欲シ茲ニ忠良ナル爾臣民ニ告ク朕ハ帝国政府ヲシテ米英支蘇四国ニ対シ其ノ共同宣言ヲ受託スル旨通告セシメタリ抑々帝国臣民ノ康寧ヲ図リ万邦共榮ノ業ヲ偕ニスルハ皇祖皇宗ノ遺範ニシテ朕ノ拳々措カサル所曩ニ米英二国ニ宣戦セル所以モ亦実ニ帝国ノ自存ト東亞ノ安定トヲ庶幾スルニ出テ他国ノ主権ヲ排シ領土ヲ侵スカ如キハ固ヨリ朕カ志ニアラス然ルニ交戦已ニ四歳ヲ閱シ朕カ陸海將兵ノ勇戦朕カ百僚有司ノ励精朕カ一億衆庶ノ奉公各々最善ヲ尽セルニ拘ラス戦局必スシモ好転セヌ世界ノ大勢亦我ニ利アラス加之敵ハ新ニ殘虐ナル爆彈ヲ使用シテ頻ニ無辜ヲ殺傷シ慘害ノ及フ所真ニ測ルヘカラサルニ至ル而モ尚交戦ヲ継続セムカ終ニ我カ民族ノ滅亡ヲ招来スルノミナラス延テ人類ノ文明ヲ破却スヘシ斯ノ如クムハ朕何ヲ以テカ億兆ノ赤子ヲ保シ皇祖皇宗ノ神靈ニ謝セムヤ是レ朕カ帝国政府ヲシテ共同宣言ニ応セシムルニ至レル所以ナリ朕ハ帝国ト共ニ終始東亞ノ解放ニ協力セル諸盟邦ニ対シ遺憾ノ意ヲ表セサルヲ得ス帝国臣民ニシテ戦陣ニ死シ職域ニ殉シ非命ニ斃レタル者及其ノ遺族ニ想ヲ致セハ五内為ニ裂ク且戦傷ヲ負ヒ災禍ヲ蒙リ家業ヲ失ヒタル者ノ厚生ニ至リテハ朕ノ深ク軫念スル所ナリ惟フニ今後帝国ノ受クヘキ苦難ハ固ヨリ尋常ニアラス爾臣民ノ哀情モ朕善ク之ヲ知ル然レトモ朕ハ時運ノ趨ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ビ難キヲ忍ビ以テ万世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス朕ハ茲ニ国体ヲ護持シ得テ忠良ナル爾臣民ノ赤誠信倚シ常ニ爾臣民ト共ニ在リ若シ夫レ情ノ激スル所濫ニ事端ヲ滋クシ或ハ同胞排擠互ニ時局ヲ乱リ為ニ大道ヲ誤リ信義ヲ世界ニ失フカ如キハ朕最モ之ヲ戒ム宜シク拳国一家子孫相伝ヘ確ク神州ノ不滅ヲ信シ任重クシテ道遠キヲ念ヒ総力ヲ将来ノ建設ニ傾ケ道義ヲ篤クシ志操ヲ鞏クシ誓テ国体ノ精華ヲ発揚シ世界ノ進運ニ後レサラムコトヲ期スヘシ爾臣民其レ克ク朕カ意ヲ体セヨ

御名 御璽

昭和二十年八月十四日

※戦後七十年戦争終結頁はやはり「敗戦の詔書」にした。降伏勧告の7月26日から8月14日迄の間何があったか、戦後五十年で出るかと思っていたが出なかった。今年の8月15日を待とう。国民の一人として。

編集後記

はらはらさせながら
戦後70年間
国民の命と財産を守り
国際的には
戦争を捨て
平和国民に
生まれかわり
世界の宝
平和憲法を
もつ国と
評価され
素晴らしいと
讃えられている

日本国憲法
第二章 戦争の放棄
第9条

① 日本国民は、正義と秩序を基調として国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。② 前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は認めない。

この憲法の方で
他の国を敵と呼ばず
一人も殺していないのに
戦後80年へ向け
殺しのできる国造りへ
しようとしている
世界の宝を血で汚そうと